

埼玉県指定史跡 「塩古墳群」の調査

熊谷市内遺跡（旧江南町）の発掘調査報告書

2011

埼玉県熊谷市教育委員会

熊谷市埋蔵文化財調査報告書 第10集

埼玉県指定史跡「塙古墳群」の調査

熊谷市内遺跡(旧江南町)の

発掘調査報告書

序

熊谷市は2度に渡る合併を経て、県北初の20万都市となり、平成21年4月から「特例市」に移行しました。現在は、新たな熊谷の未来を拓くため、魅力ある郷土を誇れる街づくりを進めています。

市域には関東随一の大河川である利根川と県土を貫流する荒川の2大河川に育まれた肥沃な大地と多様な生物が生きる豊かな自然があります。

こうした自然環境のもと、地上には先人たちの残した建物や工芸品など多くの文化財が伝えられ、地下には広範囲に埋蔵文化財が眠っています。

代表的な遺跡には、国指定史跡の宮塚古墳、埼玉県指定史跡である甲山古墳やとうかん山古墳、そして塙古墳群もそのひとつです。

塙古墳群は、昭和35年に埼玉県指定史跡になり、平成2年の公有地化後、保存管理を行っています。

本報告の発掘調査は、未解明であった塙古墳群の築造時期と古墳規模・形態を把握するために実施されました。調査結果により県内では数少ない前期古墳であり、前方後方形であるなど、学術的に大きな成果を得ることができました。

このたび、埋蔵文化財調査報告書として、その成果をまとめましたので、郷土研究等の基礎資料として、また学校教育から学術方面と広く活用されることを願います。

本報告書の刊行に際し、発掘調査から報告書刊行までに、御協力いただいた関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成23年3月

A Report of Archaeological Investigations at
Kumagaya Municipal Vol 10

SHIO TUMULUS

Excavations at a Squared-Keyhole Shaped
Tumulus Fourth Century Burial Mound in Shio

2011
Kumagaya Municipal of Education,
Saitama Prefecture, Japan

熊谷市教育委員会教育長
野原晃

例　　言

1 本書は埼玉県熊谷市（旧江南町）塩字狸塚、新田地内に分布する塩古墳群にかかる発掘調査結果をまとめた報告書である。

2 遺跡名の塩古墳群第I支群は、埼玉県指定史跡塩古墳群（昭和35年指定）を含む、江南町58号遺跡である。

3 発掘調査は塩古墳群の範囲内で行われ、いずれも調査主体は江南町教育委員会（当時）で、次の発掘調査を実施している。

1986年次 昭和61年7月18日～同年8月15日

正木谷東遺跡地点（塩I支群25号墳）

1991年次 平成3年7月8日～同年7月15日

I支群18、19号墳地点

1993年次1 平成5年2月23日～同年3月31日

I支群1、3、8号墳地点

1993年次2 平成5年11月8日～同年12月17日

I支群2号墳地点

整理事業は発掘調査後、江南町教育委員会（当時）が行い、熊谷市教育委員会がこれを引き継ぎ、平成22年度事業として報告書を刊行した。

4 発掘調査の事務運営、現場監理及び遺物整理作業は、塩古墳群については江南町教育委員会（当時）の新井端と森田安彦が担当した。整理・報告書作成は熊谷市教育委員会の新井端が引き続き担当し、本書の執筆も新井端が行った。

5 本書に使用した塩古墳群地形測量図は、江南町教育委員会（当時）が株式会社朝日テクノに委託した。また、現地には永久基準座標杭を設定している。

6 本遺跡に関する遺物及び測量図、記録写真等は熊谷市立江南文化財センターが保管している。

7 本報告書刊行までに、江南町史編さん事業での報告や資料提供による小報告があるが、本報告をもつて正式報告とする。

8 発掘調査から本書の刊行までには関係者・研究者及び多くの機関から御教示・御協力を得た。列記して感謝の意を表します。（順不同・敬称略）

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課（当時）

財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 柳田敏司

金井琢良一 菅谷浩之 坂本和俊 利根川章彦

鳥羽政之 松井一明 若松良一 宮島秀夫

福田聖 江原昌俊 広瀬和雄 大塚初重

凡　　例

本書における挿図等の指示は次のとおりである。

1 挿図縮尺は、各挿図中に示してある。

遺構の略記号は次のとおりである。

S I 縦穴住居跡 S S 集石土壙

S K 土壙 S D 溝 S E 井戸

S Z 方形周溝墓

2 挿図中、断面図に添えてある数値は標高を示している。

3 挿図中の遺物の縮尺は、次のとおりである。

土器片・土器…1/2・1/3・1/4・1/6

石器・石製品…1/1・1/3・1/4

土製品・滑石製模造品・古錢…1/1

瓦・石製品…1/4

4 遺物実測図の表現方法は、以下のとおりである。

土器片・須恵器・土器・石器断面 白抜き

赤彩・朱・灰化物 アミ10%

灰釉陶器・断面 アミ目懸

回転糸切り ↘

回転ヘラ削り ↖

回転ヘラナデ

5 挿図中の遺物はすべて観察表にその内容を記してある。計測数値中、（ ）が付されるものは推定を表す。

6 遺物拓影図は、原則として向って左側に外面を示した。なお、内外面両方を示す場合には左側に前面、右側に外面を示した。

7 本文中の「文（ ）」は巻末にまとめた「引用・参考文献一覧」の番号と一致する。

8 写真図版の遺物縮尺はすべて任意である。

9 土層及び土器の色調は、『新版標準土色帖第14版』（小山正忠・竹原秀雄編著、農林省農林水産技術会議事務局監修、財團法人日本色彩研究所色標監修、日本色研事業株式会社発行1994）を参考にした。

石材の鑑定については、海野芳聖氏に御教示を得た。

目 次

序
例 言
凡 例
目 次

第I章 遺跡の環境	4
第1節 塩古墳群周辺の地理的環境	4
第2節 塩古墳群と周辺遺跡	4
①遺跡の歴史的環境	4
②古墳群の分布と内容	5
第II章 調査の概要	6
第1節 遺跡の現状と調査経過	6
①遺跡の概要と過去の調査	6
②調査の契機と理由	8
第2節 発掘調査の経過	8
①発掘調査の体制	8
②発掘調査の経過	9
第III章 発掘調査の方法とその成果	10
第1節 第1支群の古墳分布と発掘調査	10
①第1支群の現況	10
②発掘調査	10
第2節 古墳の規模と築成構造	12
①前方後方墳・大型方墳の調査	12
第1号墳（狸塚1号墳）	12
第2号墳（狸塚2号墳）	16
第3号墳（狸塚3号墳）	16
②小型方墳群の調査	16
第5・7号墳	16
第8～12、18・19、25号墳	20
第3節 発掘調査による出土遺物	24
①トレンチの出土遺物	24
1号墳出土の土器	24
2号墳出土の土器	24
3号墳出土の土器	24
7号墳出土の土器	24
8号墳の出土遺物	26
10号墳の出土遺物	26
18号墳の出土遺物	26
25号墳の出土遺物	26
②一括出土の遺物	26
第IV章 結 語	31
第1節 塩古墳群の性格	31
前方後方墳を主体とする古墳群の性格	31
第2節 保存整備に向けて	32
写真図版	
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図 塩古墳群の古墳分布図	7
第2図 塩古墳群第1支群の発掘調査位置図	11
第3図 塩古墳群第1支群の墳形と調査位置	13
1・7号墳E 2 T平面・土層図	14
第4図 1号墳E 3 T、G 2 T平面・土層図	15
第5図 塩古墳群第1支群の墳形と調査位置	17
2号墳L 2 T、H 2 T平面・土層図	18
第6図 塩古墳群第1支群の墳形と調査位置	19
22・25号墳平面・調査位置図	21
第7図 25号墳平面・土層図	22
第8図 25号墳埋葬主体部平面・土層図	23
第9図 塩古墳群出土遺物	25
第10図 塩古墳群出土遺物	27
第11図 塩古墳群出土遺物	28
第12図 塩古墳群出土遺物	29

別添付図

別第1図 1・3号墳A 1 T平面・土層図	
別第2図 1号墳O 1 T、O 3 T、G 1 T、A 2 T平面・土層図	
別第3図 2号墳H 0 T、H 1 T、O 2 T、G 0 T、K 2 T平面・土層図	
別第4図 2・12号墳P 1 T、H 3 T、K 1 T平面・土層図	
別第5図 2号墳L 1 T、R 1 T平面・土層図	
別第6図 2号墳J 1 T、N 1 T平面・土層図	
別第7図 3号墳D 1 T、C 2 T平面・土層図	
別第8図 18・19号墳T 1 T、T 2 T平面・土層図	
別第9図 7・8号墳B 2 T、12号墳M 4 T、H 4 T平面・土層図	
別第10図 塩古墳群第1支群地形測量図	

表

第1表 塩古墳群第1支群一覧	30
----------------	----

図 版

図版1 塩古墳群第1支群3次元地形測量図	
図版2 塩古墳群第1支群航空写真	
図版3 1号墳トレンチ	
図版4 1号墳トレンチ	
図版5 2号墳トレンチ	
図版6 2号墳トレンチ	
図版7 3号墳トレンチ	
図版8 7・8・9・10号墳トレンチ	
図版9 11・12・18・19号墳トレンチ	
図版10 25号墳トレンチ	
図版11 25号墳トレンチ	
図版12 25号墳トレンチ 出土遺物	
図版13 出土遺物	
図版14 出土遺物	

第Ⅰ章 遺跡の環境

第1節 塩古墳群周辺の地理的環境

塩古墳群の所在する熊谷市塩地区（旧江南町）の丘陵頂を中心とする半径5km圏内は、時計回りに熊谷市、東松山市、滑川町、嵐山町、小川町、寄居町、川本町（現深谷市）に区分される。地形区分では比企丘陵、江南台地、大里沖積地があり、河川では荒川を別とすると和田川・滑川・和田吉野川が含まれ、これらの小河川による沖積地が狭長に連なっている。丘陵地の最高部は高根山（105.1m）中谷觀音岩（102m）二ノ宮山（131.8m）鷹巣山（139.6m）があり、それぞれの支丘陵には樹枝状の支谷と尾根が発達している。「塩」地名の原義とされる「しづわ」状の無数に入り組む開析谷は本地域の特徴のひとつである。塩古墳群を乗せる塩猩塚地区の丘陵尾根は猩塚の尾根に区分され、80m程の平坦部分となる。南に面した滑川の沖積低地は60～55m、北から東側に連続する和田川の沖積低地は70～60m程で、塩古墳群を乗せる[栗崎]—[明賀]—[諸ヶ谷]—[猩塚]—[塩西]—[西原]から古里古墳群を載せる嵐山町駒込の尾根に続く一連の丘陵地帯が両沖積地の分水界となっている。地質構造では、旧江南町域に分布する新第三紀層は比企丘陵及び荒川河岸地帯を構成する新第三紀層の一部で中新統からなる。下位より七郷層・小園層・土塙層・楊井層などで、小園層より下位の層では凝灰岩が緑色化変質を受けているが、上層では見られない。旧町域では福田層が小江川から塩の丘陵部そして嵐山町古字里尾根に露頭としても分布する。この地区的凝灰岩は青灰色泥岩や砂岩泥岩の互層からなり、層厚600～700mと推定されている。青灰色泥岩、泥岩砂岩互層には凝灰岩の大きな岩塊も含まれている（文48）。これらの凝灰岩塊、凝灰質泥岩は古墳時代には石材として切り出されており、近代では「小江川石・福田石」との名がある。石切り場跡も山裾から山頂まで多数残されている（文24）。

塩古墳群の南西側に広がる滑川の小盆地は小川町西古里、嵐山町古里・吉田・勝田、旧江南町塩、滑川町和泉の地域にまたがる穀倉地帯となっている。入間川水系の滑川は比企丘陵を南下した後、市ノ川と合流し比企丘陵を抜け出す。その位置には吉見町三の耕地遺跡の前方後方周溝墓、山の根前方後方周溝古墳が所在している。一方、北側は和田川の開析した谷津田を挟んで塩古墳群第Ⅱ・Ⅲ支群と古里古墳群とが後期から終末期の古墳群である立野古墳群と対峙する。立野古墳群の東側では第Ⅱ支群の北側に相当する位置で、延喜式内の古社と伝わる出雲乃伊波比神社が所在し、北側には寺内庵寺が位置するなど古代男衾郡櫛津郷の故地と想定している（文37）。

第2節 塩古墳群と周辺遺跡

①遺跡の歴史的環境 塩地区は比企丘陵と江南台地の接する場所で、丘陵地を樹枝状に侵食する開析谷の発達が進み、谷奥には水源として築かれた「ため池」と南斜面地には古代から集落が営まれていた。おそらく、水稻生産農業を生活の基礎としたのは弥生時代後期（吉ヶ谷期）の頃からであり、市域での集落は諸ヶ谷遺跡や新田遺跡が、嵐山町勝田の大野田西遺跡のように丘陵頂部から斜面部に集落を形成していた（文22）。弥生時代末から古墳時代初頭では和田川や滑川を望む谷津斜面に、小江川地内釜場遺跡（文24）、和田川上流の嵐山町古里北田遺跡（文14）の発掘から和田川を臨む北斜面に古墳時代前期の集落が、そして同一丘陵の頂部付近に位置する新山遺跡（文10）の古墳が造られている。拠点となった集落は和田川本流とその支流に挟まれた地点に広がる塩西遺跡（文37）で、塩古墳群（第Ⅱ支群）を乗せる丘陵である。塩古墳群第

I支群の東側になり、古墳時代前期住居跡や祭祀土壇・方形周溝墓が発掘されている。祭祀土壇からは、單口縁台付甕をはじめS字口縁台付甕、器台、壺、碗、籠目の付いた鉢形土器など約50点が一括して出土した（文8）。塙新田遺跡（文7）ではカマド導入期の住居が確認された。分水界となる丘陵の頂部には先に示したように塙古墳群の各支群が分布しており、その丘陵裾部には中小の集落が展開するものと思われる。明賀遺跡（文24）では方形周溝墓1基と焼失した住居跡が確認された。出土土器には東海地方の屈折坏部を持つ高坏やS字口縁台付甕やX字型の器台などがあり古墳時代前期初頭と予想される。古墳時代中～後期の古墳は塙古墳群中では第四支群の西原支群（文24）に多いが、主体は塙古墳群と隣り合う古里古墳群内に古墳築造の場所を移しているようである。古墳時代後期から終末期にかけては塙古墳群の西隣尾根支群ともいえる古里古墳群（文14）と和田川を挟んだ立野古墳群（文41）に新たな古墳築造の中心が移っていると考えられる。

このように塙古墳群は滑川の小盆地と和田川流域の谷田を押さえる位置にある古墳群で、弥生時代以来谷津田の開墾を発展させてきた集団より派生し、この一帯の開墾を成し遂げた中心的な集団と人物を祀るために築かれたものであろう。弥生時代以来の伝統的な方形墳群の中に前方後方形墳が築造されてくることに、地域の開発を主導した小首長の姿を見る事ができるだろう。

②古墳群の分布と内容（第1図） 塙古墳群各支群分布の把握は、1982年の塙前遺跡報告（文7）が基点となる。塙古墳群は、塙八幡神社の南北の丘陵上に広く分布する古墳群の総称である。古墳群は丘陵を樹枝状に開拓した狭隘な支谷に区分された7支谷に位置し、7支群に98基の古墳が確認されている。行政区上別となる古里古墳群を加えると151基に達する。古墳名は古地する丘陵小字地名を探っている。

I支群（狸塙支群）—36基、II支群（荒井支群）—17基、III支群（西原支群）—21基、
IV支群（諸ヶ谷支群）—3基、V支群（明賀支群）—9基、VI支群（丸山支群）—9基、
VII支群（栗崎支群）—3基、古里古墳群—52基、尾根横穴墓—1基開口

各支群は丘陵頂部付近に密集して築造され、新しい時期の古墳は丘陵裾部に位置する。尾根の傾きによりI・II・III・IV・V支群と古里古墳群は滑川左岸に面し、II支群の一部とVI支群は和田川右岸に面している。I支群の狸塙群は塙古墳群中最大の規模で標高79～80mに分布する高位群（前期古墳）と59～61mに分布する下位群（後期古墳）が認められる。II支群の荒井群はI支群の北側に連続するほぼ同一標高の丘陵上に分布している。III支群の西原群はI支群とは駒込沼の支谷を隔てて対峙しII支群とは東尾根を接している。ゴルフ場開発がされているがI支群とはほぼ同一標高の尾根上に上位群と下位群（後期古墳）が確認されている。下位群の18号墳からは埴輪を持つ横穴式石室と多くの武器と馬具が出土している（文24）。IV支群の諸ヶ谷群はI支群の南側に連続するほぼ同一標高の丘陵上に所在する。V支群の明賀群はIV支群の南側に連続する標高70m程の丘陵上に所在する。VI支群の丸山群はV支群の東側に連続する丘陵上に分布する。VII支群の栗崎群は久保谷の支谷を挟んでV支群と対峙する。丘陵頂部の標高は80m程で独立丘陵状を呈している。古里古墳群は塙古墳群III支群の西側で駒込沼の支谷を挟んで対峙し、標高60～80mの字尾根の丘陵尾根から南斜面に分布する。埴輪を有する円墳が多く、主体は後期古墳となる。塙古墳群の後継古墳群となるものと思われる。また、尾根横穴墓が凝灰岩の地山を掘り込んで造られており、和田川、吉野川、滑川での最上流地域での横穴墓である（文21）。

第Ⅱ章 調査の概要

第1節 遺跡の現状と調査経過

①遺跡の概要と過去の調査 当時、良好な里山であった塙古墳群は、昭和35年に第Ⅰ支群の中心部が前方後円墳と円墳群からなる後期古墳の代表例として埼玉県史跡の指定を受けた（文3）。以後、この地域まで開発の波が及ぶようになるのは昭和50年代であるが、この間に県教育委員会の主導による県下遺跡台帳整備に伴う確認調査で塙古墳群の分布図が作られている（文1、2、4）。昭和54年には第Ⅰ支群の中心部のみであるが大縮尺の分布図が金井塚良一の測量指導により作成され古墳の位置関係が明瞭になった（文5）。古墳群内での発掘調査初例は第Ⅱ支群13号古墳で、開発に起因した緊急調査によるため、墳形は不明だが6世紀後半から7世紀代の複室構造をもつ横穴式石室の存在が明らかになっている（文24）。昭和56年には江南村教育委員会により第Ⅰ支群の南側を通る農道拡幅に伴い、24・30号墳の周溝を発掘調査した。この調査時に周辺丘陵上の分布調査も合わせて行い塙地区全域と、隣接する嵐山町の古里・吉田地区的古墳分布状況とその群構成も検討し、滑川低地（古里・塙地区的盆地）を領域とする古墳群としての塙古墳群の分布調査と位置づけを検討した。また、周溝を共有し合う古墳群の可能性を想定した第Ⅰ支群の地形測量を実施し公表した（文7）。この時期までは美里町志戸川南遺跡（文43）、岡部町（現在深谷市）石蔵B遺跡（文35）などで、塙古墳群第Ⅰ支群と同様な密集状況を示す削平された墳墓群の発掘例が知られており、塙古墳群も前方後方形墳の可能性が予測されるようになっていた。昭和57年には菅谷浩之らの塙古墳群Ⅰ支群再測量の実施により、塙古墳群第Ⅰ支群は前方後円墳と円墳ではなく前方後方墳と方墳であろうとの指摘がなされた（文9）。以後、塙古墳群をはじめ古式古墳の墳形と築造年代を再検討する気運が高まった（文11）。なお、旧江南町でも昭和57年7月に、第Ⅰ支群25号墳を調査し方形周溝と木棺直葬の主体部を確認した。昭和58年1月、第Ⅱ支群内の塙西遺跡の調査では古墳時代前期土器の詰まった祭祀土壇を発掘（文8）するなど、塙古墳群の墳形と築造時期についての情報が集まり始めており、史跡整備計画と確認調査実施に向けて準備を行っていた。ただ、当時はバブル経済の上り坂期で、町内各所での大小の開発に伴う遺跡の緊急調査が激増中であって、ゴルフ場開発の対処に追われていた。昭和62年には塙地区を東西に横切る送電線路にかかる発掘調査により、第Ⅴ支群では方形周溝墓と同時期の住居跡を発掘し、周囲の低埴丘密集状態の古墳群については地形測量調査を行った（文24）。昭和60年より埼玉県県史編さん室は県内前期古墳の発掘調査を企図し、墳形の確認を目的とし対象古墳の発掘調査を実施した。調査の結果、美里町の鷲山古墳、吉見町の山ノ根古墳、東松山市の諏訪山33号古墳が前方後方形と確認（文12）され、古墳時代前期に遡る古墳と判明した（文11）。また、県内古墳の出現は前方後方墳からで、次に前方後円墳となり、東松山市の雷電山古墳が県内最古の前方後円墳と確認される（文24）など、前期古墳全体に関する調査情報の集積と理解が深まっていった（文15、21、40）。

このような情勢の中、塙古墳群の墳形と時期の確認問題は指定理由の検証を必要とする事態であるため、旧江南町では埼玉県教育委員会と協議のうえ、詳細な現況の測量調査と範囲確認のための発掘調査を計画したのである。なお、平成2年に江南町教育委員会（当時）では第Ⅲ支群内の緊急調査による5・6・7・9・11・18号古墳の発掘調査では横穴式石室をもつ円墳群を確認している。石室形式や埴輪・鉄製武器などの遺物から6世紀後半から7世紀前半に築造された古墳と判明している（文24、17）。



第1図 塩古墳群の古墳分布図

②調査の契機と理由 塩古墳群第Ⅰ支群の一部は埼玉県指定史跡となっており、今回の調査まで史跡内での発掘調査は実施されたことは無かった。バブル経済時代の土地流動化の中にあって、平成元年度に旧江南町では県史跡部分の恒久的な保護保存のためⅠ支群の土地、約11,000m²の民地を独自に公有地化した。将来計画として、里山の緑地を生かした史跡公園として整備する方針のもとに、「埼玉県指定史跡塩古墳群整備基本計画策定委員会」(座長 柳田敏司)を設置し、平成3年3月に歴史公園の整備と塩古墳群の保存について基本方針の答申を受けた。

この答申に沿い古墳形態の確認・古墳規模・築造時期などを把握するため、地形測量調査と発掘調査の実施について埼玉県教育委員会と協議のうえ進めることになった。事業実施は、平成4年度・同5年度事業とし、江南町教育委員会(当時)が事務と調査に当たった。発掘調査通知は5委保記第5—1001号及び5委保記第5—5297号により、史跡地内の現状変更には埼玉県指定史跡現状変更届を提出した。発掘調査は江南町教育委員会(当時)の新井 端と森田安彦が担当した。発掘調査の成果は、(『埼玉県大里郡江南町塩古墳群』『日本考古学年報 1993年度に注目された発掘調査の概要』)及び(『江南町史 資料編—1 考古 1995』)に概要を報告している。

第2節 発掘調査の経過

①発掘調査の体制 塩古墳群(第Ⅰ支群)の発掘調査事業の運営は下記の体制で行った。

(平成4年度・平成5年度)

事業主体者 江南町	調査指導 埼玉県教育委員会文化財保護課
事務局 江南町教育委員会 教育長 岡部 進 同教育次長 茂木 弘行 同主任 新井 端	埼玉県指定史跡塩古墳群整備委員会 会長 柳田 敏司 同主任 森田 安彦

(平成18年度)

事業主体者 江南町	事務局 江南町教育委員会教育長 馬場 攻 教育次長 岡田 恒雄 次長補佐 新井 端
事務局 江南町教育委員会教育長 野原 晃 教育次長 藤原 清 社会教育課長 斎木 千春	社会教育課長 斎木 千春
文化財保護担当副参事 小林 英夫 社会教育課副課長 新井 端 同副課長 出綱 康行	文化財保護担当副参事 小林 英夫 同副課長 出綱 康行
主幹 吉野 健 主査 寺社下 博 主査 鮎井 敬浩 主任 松田 哲	主幹 吉野 健 主査 寺社下 博 主査 鮎井 敬浩 主任 松田 哲
主任 蔵持 俊輔 主事 山下 祐樹	主任 蔵持 俊輔 主事 山下 祐樹

〔発掘調査協力者〕 内間靖 新島喜久雄 伊藤公成 西浩一 前島卓 高橋史郎 一以上立正大学生
森田幸雄 中島文恵 小林広子 鈴木てる 寺山岩雄 内田シズ 飯島ひろ 飯島義夫 飯島登美子 柴田清
持田秀樹 橋本克行 井上進 小久保聰 新井勉 吉田隆 上杉和助 千野カツ子 大沢玉枝 千野キク
梶一夫 増田つる 飯島健介 千野恒信 増田喜重 関口進 関口和夫 永井智教 桃園正志 水野正和
大塚宏子 大島安子 小澤三春 志村モト子 神谷君子 橋本紀子 福島和子 藤敏則 平山雄浩
松本美由紀 中島清香 関口智恵子 須藤千恵美 清水美紀 木村のぶ子 齊藤千賀子 綾川美幸
荒木千代美 石井美津子 石川幸子 神田康子 木村有美 島野美乃里 清水貴子 福島ひとみ 宮本一江

②発掘調査の経過 I支群25号墳の調査は昭和62年7月の実施で、昭和57年の塙前遺跡の調査時に古墳と認定されたものである。第I支群の18・19号古墳の調査は平成3年7月の実施で、墳丘裾を通る私道に水道管を埋設する工事の事前調査で、道路部分の狭い調査区であったが両古墳の周溝が確認された。また、公有地化がなされた部分で宅地建物が所在した箇所の建物撤去が9月までに行われ更地となった。ここは、31号墳の所在位置と想定している。昭和63年～平成4年まではゴルフ場の造成に伴う大発掘調査を町で対応していくため、専門職員の増員があったものの発掘調査は途切れていなかった。

平成4年度の調査では12月に現地入りし、現地踏査のうえ第I支群の展開する約20,000m²の丘陵地全域を地形測量範囲に設定した。統いて、地形測量作業に備え旧地形と古墳の姿を現すための清掃作業に取り掛かった。現況の山林は維持管理が放棄されたままで、密生状態の雑竹が生い茂る藪に松枯れによる倒木があり、鋸や山鎌を手に伐間作業を行う作業員の姿は約一ヶ月半かかった。景観は一変し、いくつもの古墳が姿を顯すと、密集状況を示す古墳の様子が直に望まれた。清掃作業を終え、測量を行うため国家座標による基準点の設定と古墳の墳丘の立ち上がりや周溝の範囲などの遺構変換点を検討し測量に備えた。現地測量は朝日テクノ株式会社の受託事業とし、同社の測量士と共に現地測量作業を行った。

発掘調査は平成5年3月1日より開始した。調査は第I支群の北半部を対象としたもので、測量図の検討を元に各古墳の要所に試掘坑を設定した。試掘坑の設定古墳は、第I支群の1・3・4・5・6・7・8号古墳を対象に墳丘規模と周溝を確認すべく、各墳丘の間に都合7本の試掘溝を設定して発掘を開始した（平成4年度分）。試掘坑の配置は第2回・第1表のとおりである。試掘坑は3基の大型墳を主とし、第1号墳より後方部、前方部の想定地に立木をよけて設定した。設定後は人力により発掘作業を進めた。3日目には1号古墳の墳丘が前方後方形をすることが判明し、後方部墳丘から転落したと推定される二重口縁壺が出土したため、同古墳群の墳形・築造時期は改められることが有力となった。7号古墳も方墳と推定され、周溝からは二重口縁壺などが出土した。いずれも4世紀中葉以前の特徴を示す遺物であり、他の古墳も方墳である可能性がより高まった。3月には新聞報道により、古墳の形と年代を書き換える発見が伝えられた。

平成5年度は全域の測量図（別第10図）と北半の発掘調査結果に基づき、南半の古墳形態の確認と全体の補足測量調査をおこない地形測量図を完成させた。発掘調査については第I支群の南半部を対象としたもので、第2号古墳から第10～12号古墳までの密集した分布状況を示す古墳間に試掘坑を設定し発掘調査を行った。前年度の知見より各古墳は方形と予想されるため、第2号墳は前方部の確認を主とし、整った三角形を呈する前方部が現れ、前方後方墳であることがわかった。また、第2号墳の東側空間地帯は、岩盤面まで土が掘削されることから古墳墳丘の採土部分であることが想定された。古墳墳丘に関しては第10号古墳が円墳であったことが確認されたほかは、調査古墳のすべてが方墳であった。出土遺物に関しては微細な土師器片以外に目立った出土がなかった。発掘終了後は前年度と同じく試掘坑によって確認した遺構面には保護砂を充填し埋め戻し、旧状に復している。以後、史跡管理地として古墳群内の下草刈を継続しているが、平成7年には、古墳上に生えている杉・檜の立木をすべて取り除き、倒木による地形変化を防止し、古墳墳丘を視認し易くする切り払い事業を行った。同時に埋戻し後の試掘坑での沈下部分に客土も行っている。

なお、同年3月17日付 教文第1140号で、県教育委員会より指定用件変更の通知を受けている。

第III章 発掘調査の方法とその成果

第1節 第I支群の古墳分布と発掘調査

①第I支群の現況 第I支群の史跡部分は古墳集中部分の22基からなっている。標高79～80mの丘陵尾根平坦地を基底面としており、西へ43°～45°傾く尾根筋に古墳主軸を添わせ古墳が配列している。その範囲は丘陵平坦面の全域に相当し、幅約80m長さ200mほどである。北側は丘陵地形をよく残しているが、南側は宅地造成や耕作地の造成などで斜面の段築改変を受けており、何基かの消滅古墳の存在が予想される。また、3号と4・27号墳間、1号墳と2・8号墳間、2号墳と10号墳間の三箇所に不自然な窪みが確認されたが、第二次太平洋戦争中に軍需物資を隠し置いた跡との情報を得ている。とくに1号と8号では墳丘の一部が削り取られるなどの改変が認められる。31号墳は昭和31年時に、方墳と報告されていたが、昭和30年代の宅地造成に際して削平されたらしく、現況ではその想定地は闇地となっている。

現地測量はまだ檜・杉などの立木が多いため、人力測量を主とし航空地形測量により補足した。昭和56年当時の測量では30cmの等高線で表記したが、今回は20cm等高線で表記し部分的に10cmで補足した。素図は40分の1とし、完成図は100分の1縮尺とした。現地作業は3月5日に終え、3月末までには図面の修正、清図を行い完了とした。なお、古墳群を囲む4点を永久基準点として設置しておいた。本報告附載の全測図は1/500（別第10図）としている。

旧地形と古墳の立地については、旧表土面を北から順に3・1・2号墳の墳丘裾部で確認しており、検出できた古墳墳丘で次の数値を示していた（墳丘盛土は断割をしていないが、地山削出の墳丘基部に旧地表と盛土境界が見て取れた）。旧表土面は、盛土築成の基壇面となっている。

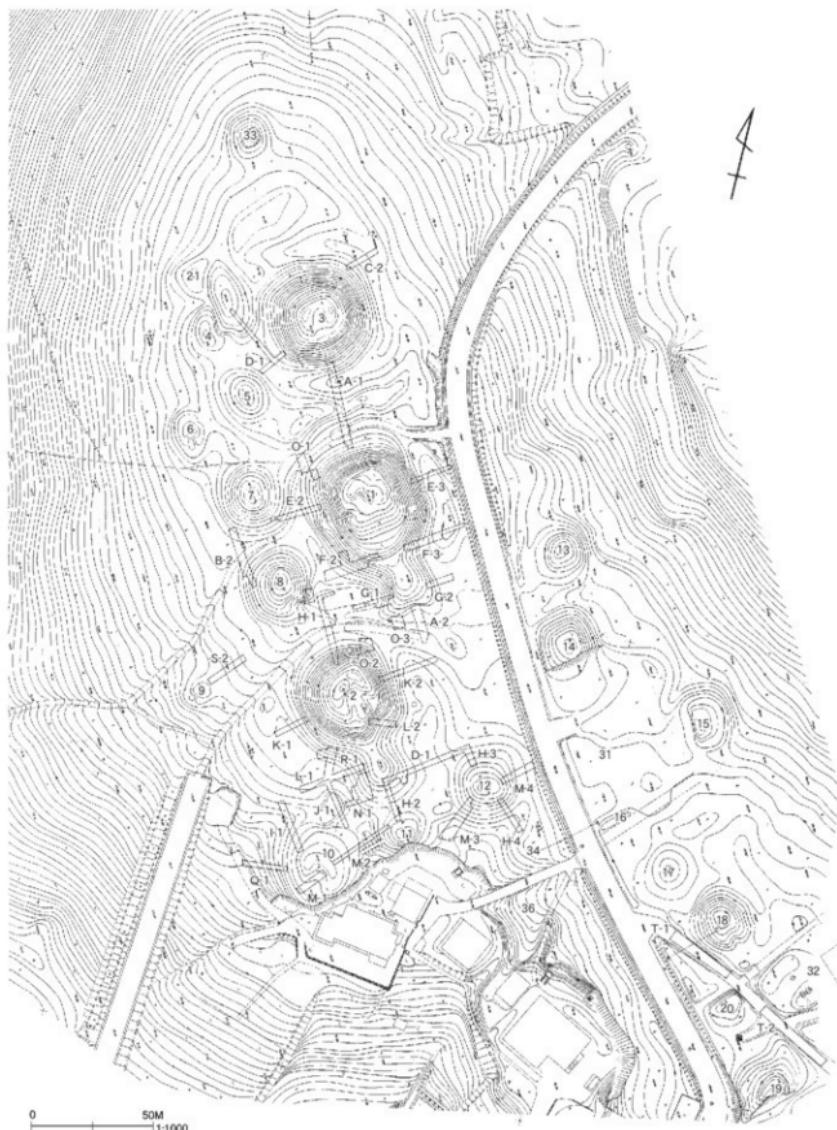
3号墳 [C 2 T—81.20m, D 1 T—81.20m]

1号墳 [A 1 T—80.80m, E 3 T—81.00m, F 3 T—80.70m, G 1 T—80.80m, G 2 T—80.80m,
O 3 T—80.40m]

2号墳 [O 2 T—80.60m, K 2 T—80.50m, L 2 T—79.90m, R 1 T—79.20m]

この旧表土高から旧地形を想定すると、古墳築造時には3号墳付近が最高所に当たり、3号墳から1号墳、そして2号墳へと100mほどの距離で、約1～2m南方へ高度を減じる馬の背状の尾根であったこと示している。古墳の築造順は、高所から下降する順に、3号墳→1号墳→2号墳であったと推定される。また、現在民家が所在する部分は標高80m部分の斜面余地があり、古墳群の広がりは25号墳付近まで南側へ広がっていた可能性がある。塩新田・塩西遺跡などで検出される4～5世紀代集落の存在を考えると、18～20号墳と対になる大型墳が築かれていた可能性がある。

②発掘調査 発掘調査は古墳の墳形・規模を確認し、時期を推定できる上器等の出土遺物を得ることが主要目的であるので、古墳裾部から周溝推定地の平坦部に試掘坑（以下「トレンチ」という、また記号表記は「T」を使う）を設定した。トレンチの設定に当たっては古墳の主軸方位とその直交方位を基本としたが、立木や要所部分については適宜、任意に設定をした（第2図、第1表）。実際には前方後方が前方後円かを把握するため第1・2号墳については多数のトレンチを設定した。なお、1号墳の墳形が確認された時点で、他の小古墳は方墳であるとの判断が高まったので、必要最小限の試掘トレンチを設定することとして後の調査を進めた。トレンチ設定の合計面積は約500m²で、34箇所の試掘トレンチを設定した。



第2図 塩古墳群第1支群の発掘調査位置図

第2節 古墳の規模と築成構造

①前方後方墳・大型方墳の調査

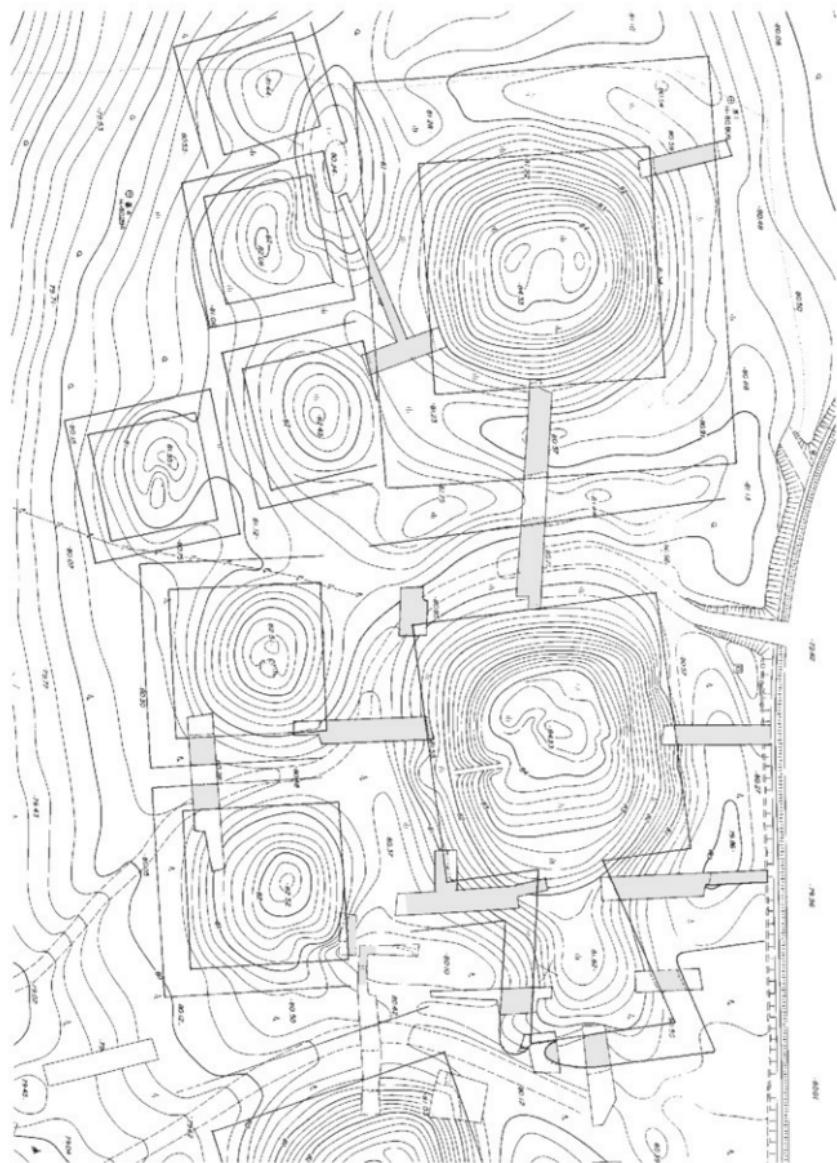
第I支群中は前方後方墳2基と大型方墳1基、前者より規模の小さい小古墳からなっており、前者は三代にわたる群の首長墓、後者はその構成員と捉えている。

第1号墳（猩塚1号墳）（第3、4、5図・別第1、2図） 第1号墳は主軸に対して相似となる前方後方墳で、主軸方位N—36°—Wを示す。墳丘主軸長35.8m、後方部軸長21.4m、後方部辺長20m、くびれ部幅5.2m、前方部長13.9m、前方部幅11.9m、後方部高4.2m、前方部高1.2mを測る。後方部軸長と前方部軸長の比は2対3となる。古墳の立地する基底面は標高約80.00mを測る一方、岩盤は80.10m付近で露出することから、掘鑿可能な岩盤付近まで古墳築造の基底面としたと考えられる。1号墳の後方部墳丘高は標高84.33m、周溝底から約4.2mであるが、後方部での盛土高は現状で約2.78mと推定される。これは、旧地形から約1.5m削り出されたいわば墳丘基壇を作り、この基壇上へ周溝などの切土を直に嵩上げし盛土を行っている。この旧地標高である基底面を段築部とすることで墳丘は二段築成していたと考えている。また、現状で約4mの墳丘を擁していることから、埋葬主体部は後方部の中央旧地表付近に墓壙を掘り込んでいると推定される。

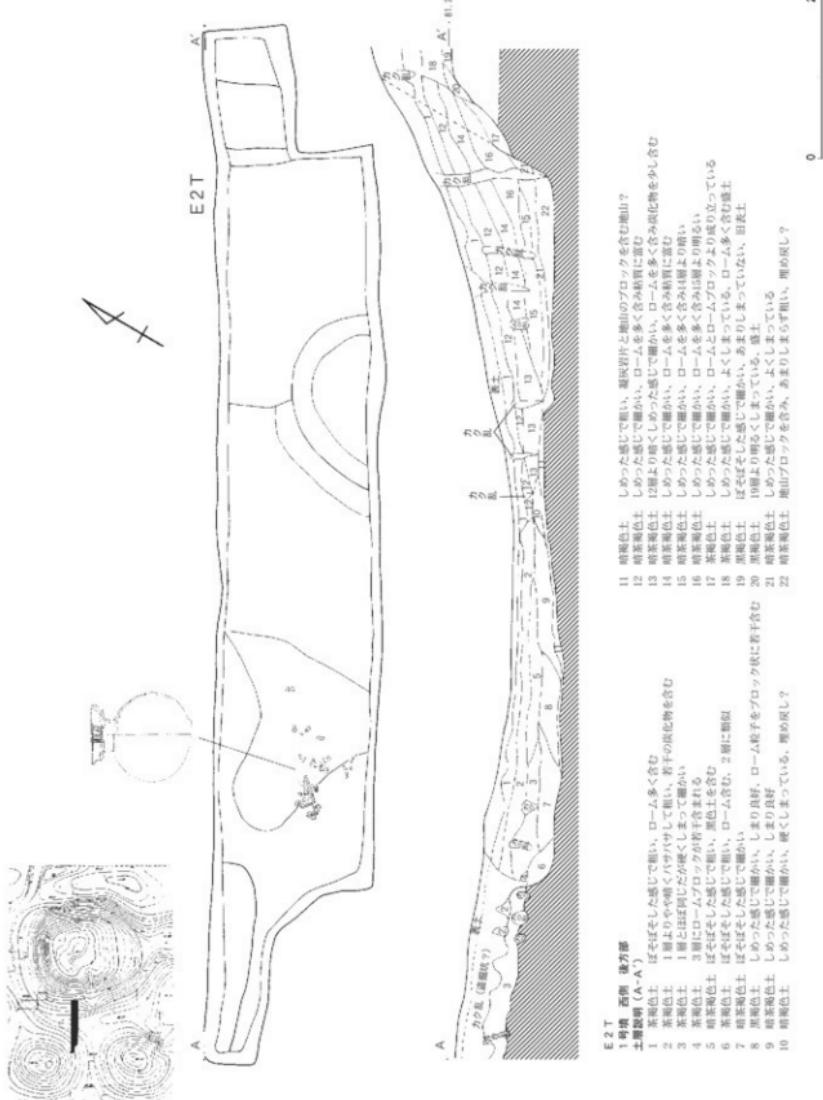
現況では後方部北端に偏って墳丘上面に8×9mの平坦面が確認されるが、これは近代まで社があったとされる部分に相当する。西側では1m以上の盛土の流失が認められたが、後世墳丘上にあったという社の建築や参拝などによる改変と思われる。前方部では東側のF3Tと西側のF2Tによりくびれ部の幅を推定している。なお、8号墳と前方部の間には近代の擾乱が約12×8mの範囲で確認された。これは、7号墳の南東隅と前方部西側の墳丘の歪みの原因である。前方部は直線状を呈し、幅約2.3mの周溝が巡るが、南北隅部で途切れしており墳丘への陸橋となっている。墳丘の東側は想定周溝部分だが道路で開削される。この位置のトレンチE3T・F3Tでも周溝外側の立ち上がりは確認されない。明瞭な周溝は後方部北側部分と前方部の取り巻で確認されるが、前方部南北隅が途切れる。後方部北側では幅6.1m、深さ0.7mで、周溝底部は平坦で一部岩盤まで達している。周溝外側での軸長は約43mを測る。西側に隣り合う7・8号墳とはE2T、F2Tのトレンチに見る限り周溝は不明で確認できない。覆土も浅く平坦面（古墳基底面とするほぼ水平な地面）を共有している状況と推定している。

A1T部分では標高約80.10mで凝灰岩質の地山に達し切土は不可能となるため、周溝は埋没部分でも0.6m程度であることから、土量を確保する方法として周溝の深堀ではなく、掘鑿面積を拡張することで必要土量を確保したと推定される。本墳の場合東側から東南側に地山を切り下げていることがうかがえる。ここに低墳丘ではなく高い墳丘により、威圧する側面観を持たせることを意図したと思われる。3号墳、1号墳、2号墳の東～南側の空闊地はそのような水平面をも意図した切土範囲であったと思われる。丘陵上で旧地形を利用し表上面より盛土している例は同時期の新潟県巻町の山谷古墳（前方後方墳）などに類例がある（文20）。一方、岐阜県養老町象鼻山古墳（前方後方墳）では盛土をすべて除去した後、岩山の地山から盛土している（文33）。同時代の古墳でも築成方法が多様である（文18、38、49）。

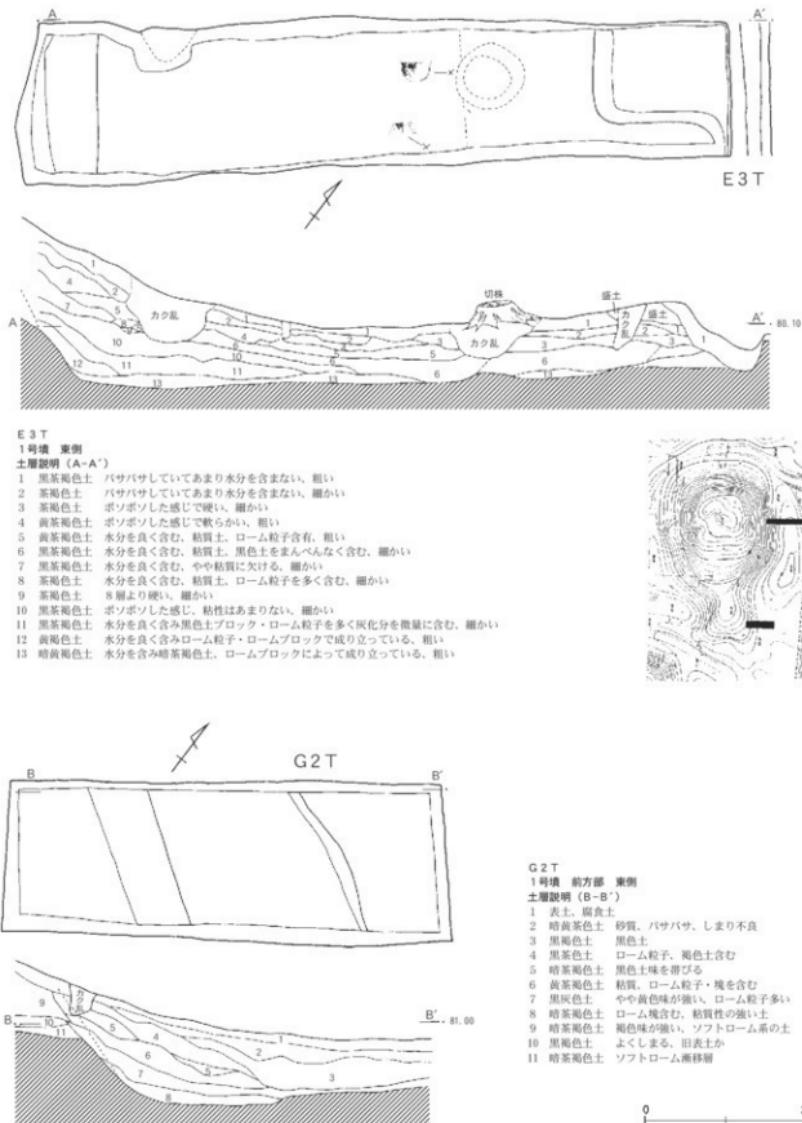
出土遺物は、A1Tの墳丘側と周溝外側部分とO1Tから、本墳に伴う二重口縁壺が出土している。墳丘上からの転落による流れ込み（第12図1）と周溝外側からの流れ込み（第12図2・3）と推定される。他は碎片の土師器が出土したのみで遺物量は少ない。しかし、二重口縁壺に2種があり、時期差と見ることもで



第3図 塩古墳群第Ⅰ支群の墳形と調査位置 1



第4図 1・7号墳E 2 T平面・土層図



第5図 1号墳E 3 T、G 2 T平面・土層図

きる。また、A 1 Tでは周溝底から拳大の河川礫が数十点出土した。葺石にして少量であり、埋葬主体部に関連して使われたものとも推定されるが、性格は不明である

第2号墳（狸塚2号墳）（第6、7図・別第3～6図） 第2号墳は後方部の主軸と前方部の主軸が傾く特徴があり、後方部はN—46°—W、前方部はN—34°—Wを測り双方の差は12°を示す。2号墳の前方部主軸は1号墳の主軸に近い前方後方墳である。墳丘主軸長30.1m、後方部軸長18.1m、後方部辺長20.1m、くびれ部幅5.3m、前方部長12.0m、前方部幅11.4m、後方部高83.18m、前方部高80.61mを測る。後方部軸長と前方部軸長の比は2対3となる。墳丘の構築法は1号墳とはほぼ共通することが、墳丘基部のトレンチからうかがえるので、ここでは繰り返さないが、1号墳より一回り規模が小さい。

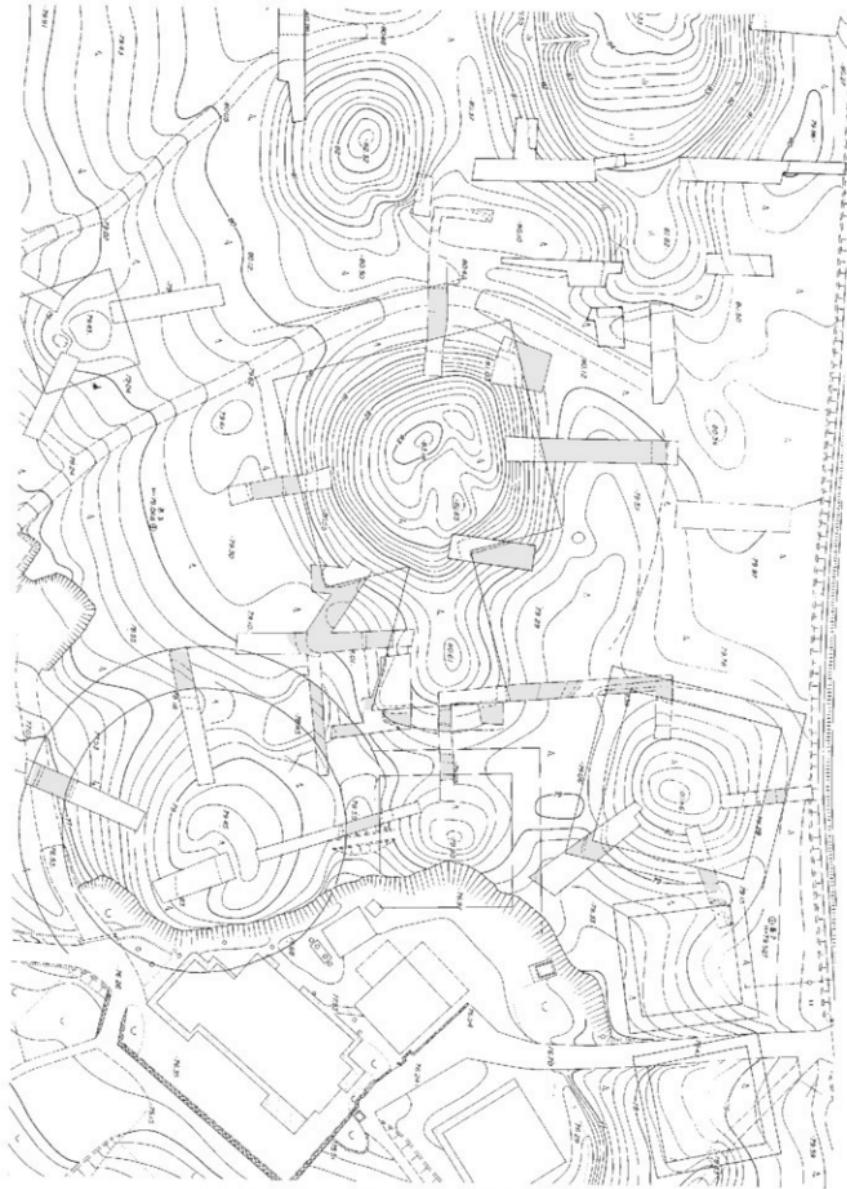
古墳の立地する基底面はK 2 T付近で標高約78.9mを測る。2号墳の後方部墳丘高は標高83.18m、周溝底から約4.28mであるが、後方部での盛土高は現状で約2.6mと推定される。これは、旧表土高が約80.50mであることから、旧地形から約1.6m削り出されている。墳丘上面は凹凸が激しく後世の盗掘等による搅乱を受けているため、1号墳に比して平坦部は無い。周溝は後方部の一部と前方部の一部前で確認される。後方部西側のK 1 Tでは幅5.3m、深さ0.3mで、周溝底部は平坦で一部岩盤まで達している。周溝外側の立上は旧表土を想定するとほとんどない。東側のK 2 Tでは幅11.9m規模である。現状からも窪地となっていることが確認されるほど浅く幅広い。西側と同様周溝外側の立上はほとんどない。後方部のH 1 Tでは幅4.8m、深さ0.3mを測る。前方部の周溝もほとんど平坦面で、わずかに周溝の窪みが観察されるに過ぎない。滑川低地への眺望が最も良い付近である。出土遺物では、墳丘北側と周溝部分から、本墳に伴う有段口縁壺、鉢などが出土している。他は碎片の土師器が出土したが遺物量は少ない。

第3号墳（狸塚3号墳）（第4図 別第7図） 第3号墳は、旧地表の最高所に位置する方墳である。一辺19mの方形を呈している。墳丘上面は83.40m付近から9×9mの範囲が平坦となる。一部盜掘坑と思われる窪みがあるが比較的良好に墳形を保っている。南北軸を主軸方位とするとN—35°—Wを示す。南辺にかかるA 1 T、西辺に設定したD 1 T、北西隅部に設定したC 2 Tから周溝を確認している。現況の窪地と一致していることから周溝は全周するものと推定される。東西辺の幅4.6～5.6m、南北辺の幅7.6～8.0mと推定される。1号墳との間には周溝の余地が掘り残され周堤状を呈している。北西部分の周溝の窪みは後世の搅乱で第二次大戦時の物資保存塙であり、墳丘西側に続く周溝上の高まりはその堆土山であった。古墳の立地する基底面はC 2 Tで標高約80.05mを測り、旧地表は81.20m付近となることから、古墳築造の基底面まで1.15mの基壇を削り出し、盛土を嵩上げした墳丘は標高84.33m、周溝底から約4.2m以上の高さを有していたと推定される。規模と立地から1号墳に先行する築造と推定される。なお、D 1 Tからは5号墳の埋没周溝を3号墳周溝が切っていると観察される。5号墳は3号墳より遡ることになり、小規模墳が先行して築かれたか、後に3号墳の周溝を掘り直した可能性が出てくる。出土遺物は流れ込みの土師器碎片である。

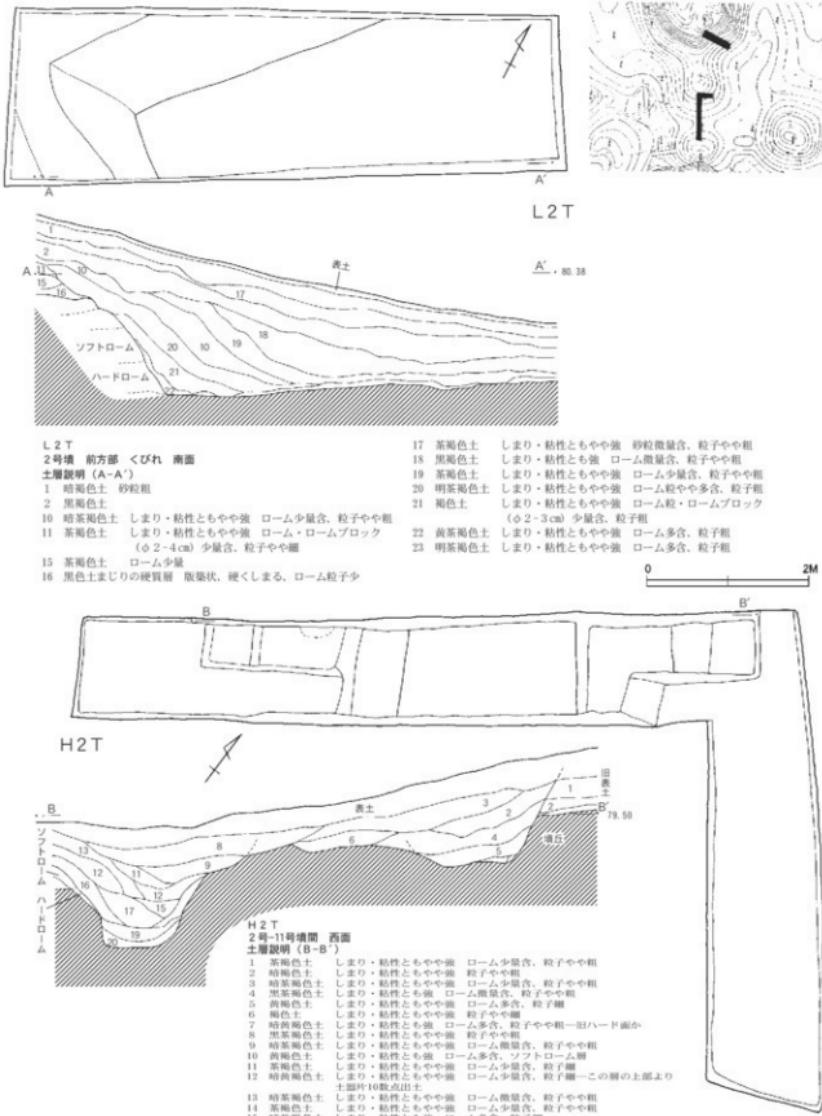
②小型方墳群の調査（第3・4・11・12・14～19図）

第5号墳は、C 1 Tで幅1.1mの周溝が確認された。現状では1.2mほどの低墳丘だが周溝が廻ることが予想された。出土遺物は無く、時期の決め手はないが、3号墳周溝の掘撃以前に築かれている。

第7号墳は、E 2 T、B 2 Tにより墳丘裾が確認され、一辺12.4mの方形墳になると推定される。墳丘頂が82.51mで、基底面がE 2 Tでは80.06mであることから、81.4mの高さを持つ旧表土高は確認できなかつ



第6図 塩古墳群第1支群の墳形と調査位置 2



第7図 2号墳L2T、H2T平面・土層図



たが、墳丘裾部では硬質ロームを削り出していることから約1.0m程度の盛土をしていると推定される。また、E 2 Tでは墳丘裾部から二重口縁壺が押しつぶれて出土している。底部下半を欠くが、墳丘上からの転落状況を示していると思われる。

第8号墳は、B 2 T、H 0 Tにより北辺・東辺を確認している。想定される規模は一辺13mの方形墳となる。墳丘標高は82.32mで、墳丘高、規模、主軸方位とも7号墳に近似している。

第9号墳は、標高78~79m付近の緩斜面地に立地する低墳丘墳でS 2 T、S 1 Tでは掘り込みを持つ周溝は確認されず、周溝と思われる浅い凹みが観察されたに過ぎない。位置・規模・形状とも他の構成墳と異なることから、築造時期の異なる墳墓か、土坑墓程度の低墳丘墳とも想定される。

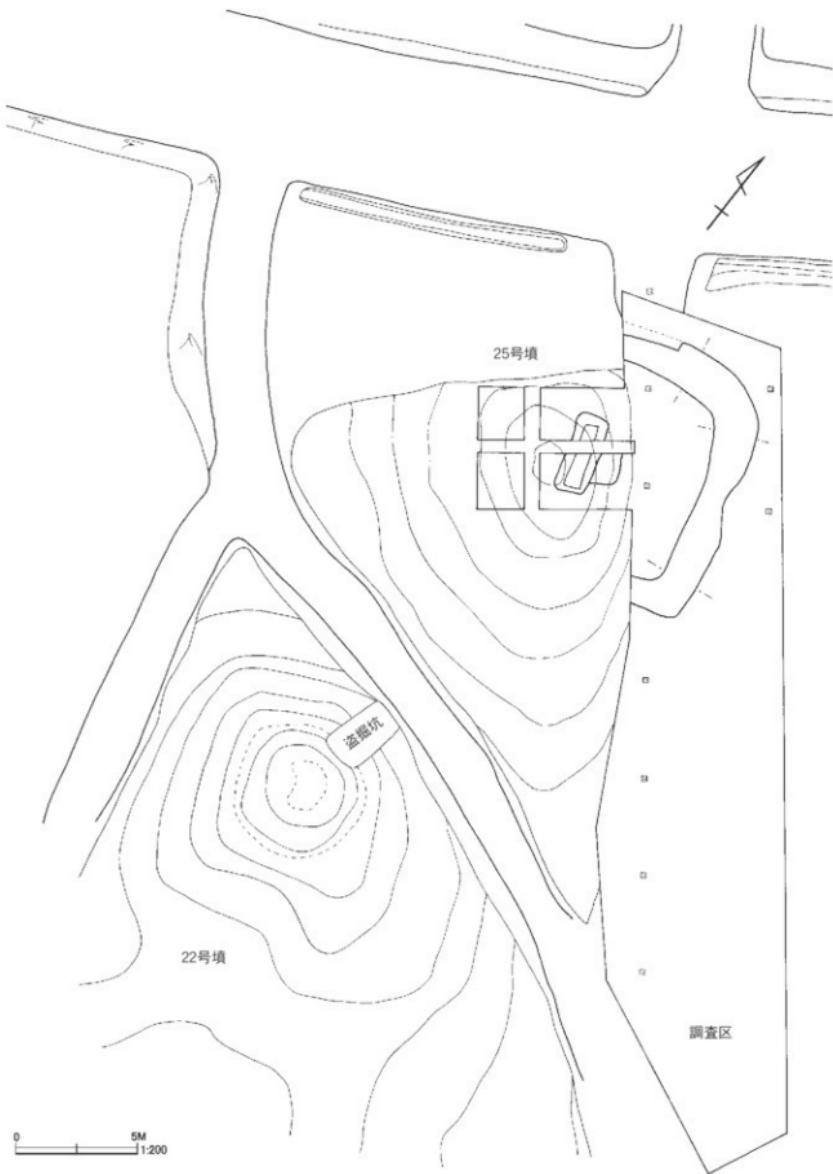
第10号墳は、直径23.1mの円墳で、横穴式石室を有していた。トレンチ内の確認であるため規模は一部であるが、石室幅は3.6m程と推定される。天井は取り去られており、後世の擾乱が入っている。凝灰岩截石積みの横穴式石室を構築していたようである。覆土から7世紀前半で置かれる須恵器平瓶破片が出土したこと、埴輪を持たないことから7世紀前葉の小円墳がI支群の余地に築造されたものである。塙古墳群では本例のような古墳は本墳だけのようである。

第11号墳は、H 2 Tで周溝が確認されている。一辺約11mの方墳となる。南側は3.1m削り下げられた崖となって民家敷地に続く。墳丘標高79.90mで集溝底は77.9mであり、見かけ上2.0mの墳丘高をもつ。実際の墳丘盛土高は0.4mほどである。なお、10号墳間の土橋は、民家への雨水流下防止用のため造られたものである。

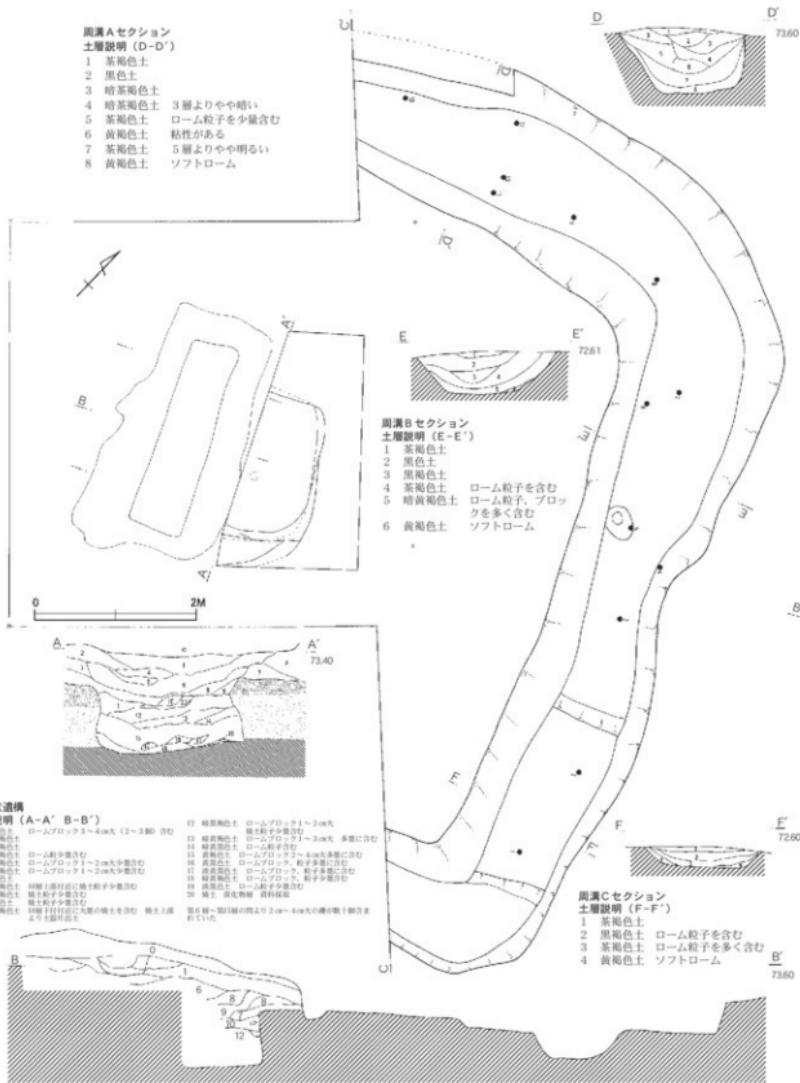
第12号墳は、一辺13mの方墳となる。墳丘標高80.66mで、基底面はH 3 T、M 4 Tでは77.9mであり、見かけは1.6mの高さを持つが、埋没谷斜面部に位置することから斜面上位での掘り込みは深く、斜面下位では浅い。周溝底からの見かけ上の墳丘高は2.76mである。上位側での掘鑿を深くして土量を得た結果であろうが、旧表土からの盛土は現況で0.8m程度であると思われる。遺物は土師器碎片のほかはない。H 4 Tでは、南側に溝を確認しており、当該地の地形形状から新たな低墳丘墳と認め34号墳とした。

第18号・19号墳（別第8図）は標高80m付近に位置している。水道施設部分の調査により周溝を検出した。周溝の外側での確認だが直線を意図した掘方の様子から両墳とも一辺約13mの方墳と考えられる。

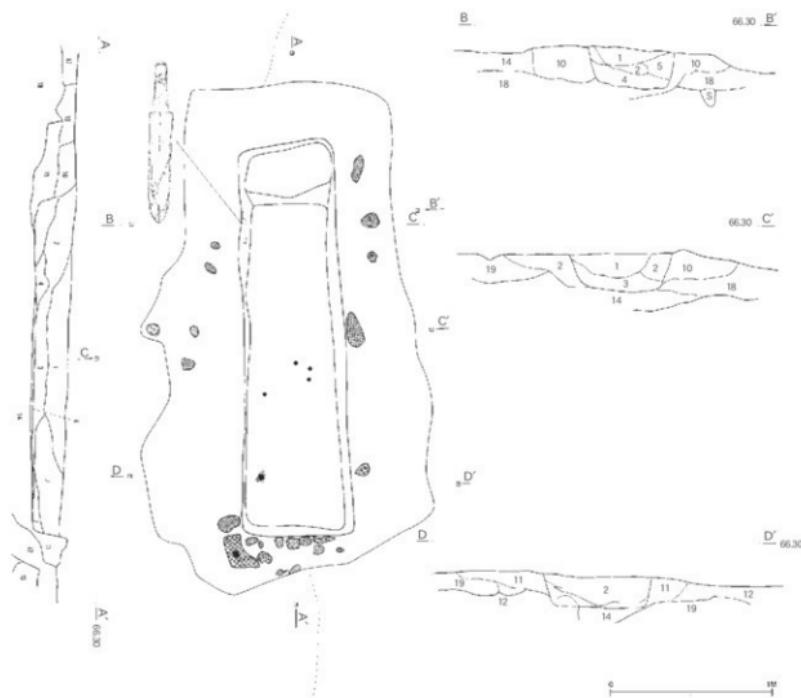
第25号墳（第20~23図）は、I支群の東端II支群との間に築造された方墳である。東西の谷に面する尾根上に立地し標高は約72mである。低墳丘墳の可能性があることから、道路拡張時に確認調査を行ったところ方形の周溝と埋葬主体部が検出された。一辺7.8m、周溝幅1.5~2mで、墳丘のはぼ中心に、N-25°-Wの主軸方位を持つ埋葬主体部が位置する。この埋葬主体部は現存墳丘の直下0.13mで確認されたが、覆土中には上面を覆う粘土等の敷設も行わない木棺直葬であった。掘方長3.1m、幅1.5m、木棺の長さ約2.0m、幅0.6mを測る。掘方覆土にはハードローム塊を多く含んでおり、木棺の南側では木棺の押さえとして集中して使ったものらしい。出土遺物はほとんど無く、周溝からも土器碎片しか出土していない。主体部の棺内位置から鋒を南に向けた状態で短剣が、棺内の中央付近からガラス玉片が出土した。また、主体部の下位に土壙があり、茅類の葉・茎等の炭化材や灰・焼土を多量に混在していた。他の遺物は出土していないが、古墳築造に伴う祭祀土壙の可能性がある（文18）。



第9図 22・25号墳平面・調査位置図



第10図 25号墳平面・土層図



主体部セクション

土層説明 (B-B'・C-C'・D-D')

- | | | | |
|---------|--------------|----------|------------------|
| 1 前褐色土 | 軟質土 | 10 黄茶褐色土 | 軟質 |
| 2 暗茶褐色土 | ロームブロック多量に含む | 11 黄茶褐色土 | ロームブロックを多量に含む |
| 3 暗茶褐色土 | ロームブロック少量に含む | 12 黑茶褐色土 | |
| 4 黄茶褐色土 | やや軟質 | 13 黄茶褐色土 | ローム粒子を多く含む |
| 5 暗茶褐色土 | ローム粒子少量含む | 14 黑茶褐色土 | ロームを斑状に含む |
| 6 暗茶褐色土 | ロームブロック少量含む | 15 黄茶褐色土 | ローム塊を多量に含む |
| 7 明茶褐色土 | 硬くしまる | 16 黑茶褐色土 | ローム塊を多く含む ローム粒子多 |
| 8 黑茶褐色土 | | 17 黑茶褐色土 | |
| 9 暗茶褐色土 | ローム塊多く含む | 18 黄茶褐色土 | |
| | | 19 黑茶褐色土 | |

第11図 25号墳埋葬主体部平面・土層図

第3節 発掘調査による出土遺物

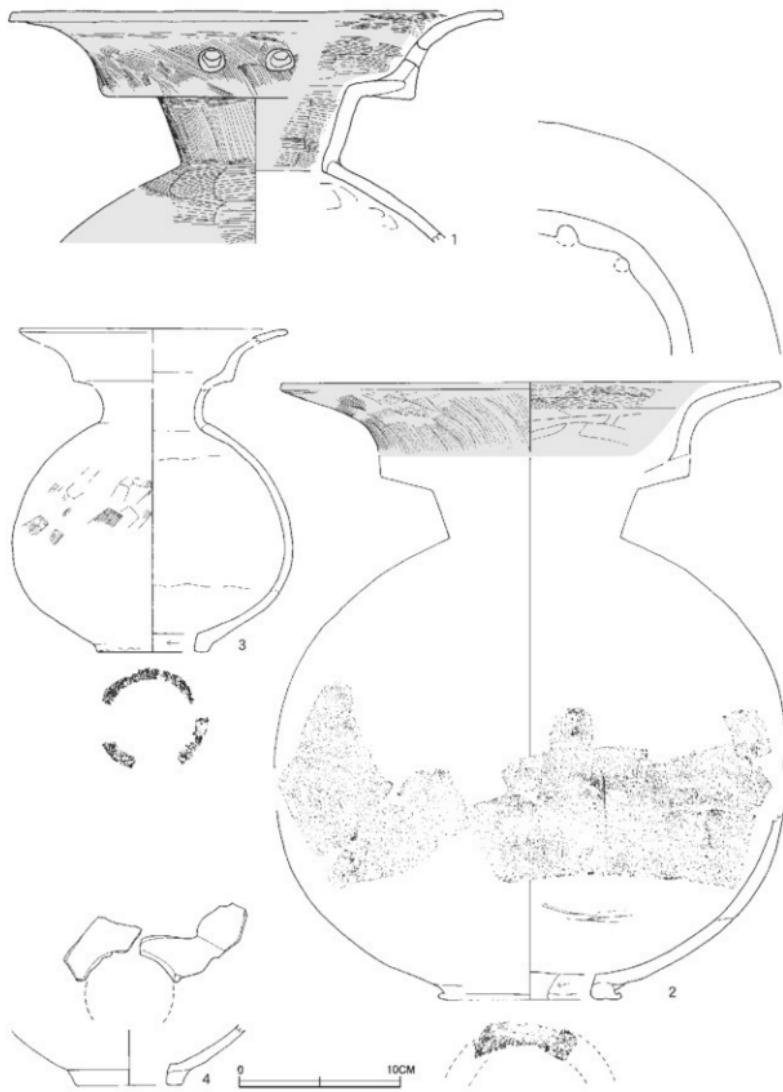
①トレチの出土遺物（第12～15図）

1号墳出土の土器 後方部北側の埴丘掘から周溝に設定したA 1 T内では、1・2・4・5・6・8が出土している。1は二重口縁壺で埴丘掘から出土した、後方部埴丘上から転落したものであろう。口縁部～頸部まで完存し、外面全体と頸部中側まで赤彩の痕跡が残る。体部は胴中央部に最大径を有する球胴形をなすと思われ、頸部はやや長く外傾し、口縁は緩やかにやや外反している。口縁部には、焼成前の穿孔により直径約1.3cmの円孔二個を1単位として対向に配置している。口径30.6cm、頸部の高さ9.1cm、頸部の直径9.6cmを測る。口縁部の形態は、口唇部一外向し、あまい面取りを行う。受け部一擬口縁の手法は擬口縁上に口縁部を載せ、断面三角形の凸帯を貼付している。これは口縁部形態の分類ではB 2類に相当する（文26、44、46）。調整はヨコハケ痕が明瞭に残されている。2は周溝外寄りから出土した二重口縁壺である。口縁部の全体と底部の一部が検出された。器高は約38cmに復元される。口縁部形態は1に比して外反の度が強いが、ほぼ同一の法量・調整・赤彩をしており、円孔の配置も同様である。口径直径30.4cm、底部直径は11.1cm、底部の穿孔は焼成前で、円孔の直径は7.2cmである。5は二重口縁壺の口頭部で擬口縁部から剥離している。B 2類の形態をしている。6は口径・胴径・器高がほぼ等しい、ややすす詰まりの変形土器である。口径・器高・胴径は約22cmで、底径7.5cmである。調整はナデによりケズリが磨り消される。8は小破片であるが甕又は壺の口縁で赤彩されている。後方部西北隅部に設定したO 1 Tからは、3・7が出土した。3は、1・2に比して小型の二重口縁壺で、口径は約16.8cm、頸部径7.1cm、器高約19.7cmに復元される。底径は7.1cmで、焼成前に穿孔される。円孔の直径は5.1cmを測る。口縁の一部しかないが、短く緩やかに直立する頸部から二重口縁が作り出される。体部の下半に最大径を持ち、調整はハケ目をほとんどナデ消す丁寧なつくりをしている。4も3と同形態を採ると思われる。3は埴丘より転落したものであろう。7は口径約16cmの高壺。後方部東側の周溝に設定したE 3 Tからは、9は台脚破片、10の小型鉢が出土した。10は口径11.2cm、器高約8.5cmを測る。口縁部は上外方へ薄くつまみ出される。丁寧なヘラミガキと赤彩が施される。

2号墳出土の土器 前方部から後方部付近の周溝へ設定したJ 1 TとR 1 Tから12と13が出土した。12は胴部中位に最大径を持つ鉢型土器で、完存していた2号墳の括れ部に近い場所であることから供獻された器と考えられる。口径12.5cm、器高12cm、底径4.5cmを測る。口縁は直立し、体部は丁寧にヘラナデ調整されている。13は有段口縁壺の口頭部で体部を欠失していた。口径17.4cm、頸部径10cmを測る。口縁外面に粘土を貼り付けて段をなしている。ハケ、ナデにより調整される。

3号墳出土の土器 3号墳と5号墳間に設定したD 1 Tより、14・15が出土した。覆土中であることから5号墳に歸属する可能性もある。14は、屈曲する頸部の形から二重口縁壺の頸部であろう。頸部径約12cmを測る。15は焼成前の穿孔を残す底部破片で、底部の突出する二重口縁壺と思われる。

7号墳出土の土器 1号墳—7号墳間に設定したE 2 Tから18が、7号墳—8号墳間に設定したB 2 Tから16・19が出土した。18は、二重口縁壺で7号墳の埴丘掘から周溝部分に破片がまとまっており、同埴丘より転落したものと思われる。底部下半を欠く以外ほぼ完存している。口径21.5cm、球胴形をなす。胴部最大径32.8cm、頸部径11.3cm、器高約37.8cmである。球胴形の体部から直立する短い頸部が立ち上がり、擬口縁から角頭状に面取りをした口縁を外反させる。受け部一擬口縁の手法は擬口縁上に口縁部を載せ、擬口縁を包



第12図 咸古墳群出土遺物

込ように粘土を附す。口縁の外面には口縁の外周をほぼ五分割した位置にそれぞれ棒状粘土を4本貼付した装飾を施す。但し、一箇所のみ5本としている。器面の調整はわずかにハケメ調整を残すが全面を細かくヘラナデされ、磨かれて滑沢をもつ。胴下半は接合部分で欠失しているが、外面の全面と頭部内面まで赤彩をされている。焼成良好で明褐色をしている。16は有段口縁壺の口縁部破片で口径約20cmとなる。角頭状の面取りがなされ、丁寧なヘラミガキとともに赤彩が施される。19は18とはほぼ同形の二重口縁壺で、口縁の半分が遺存していた。同一意匠を採っており、同形・同一調整が施されるが、口縁部の棒状粘土手装飾は遺存部分から5分割で3本貼付を基本としているようである。口径約21cm、頭部径約9.4cm、胸部最大径約26.2cm、器高約32cmを測る。なお、直接接合しないが赤彩の施される体部下半は同一個体とした。

8号墳の出土遺物 7号墳—8号墳間に設定したB2Tより、8号墳の周溝上面より17が出土した。17は受け部を欠失しているが器台の脚部で底径9.6cmを測る。脚は緩やかに外反り、丁寧なヘラミガキ調整が施される。脚に穿孔はない。

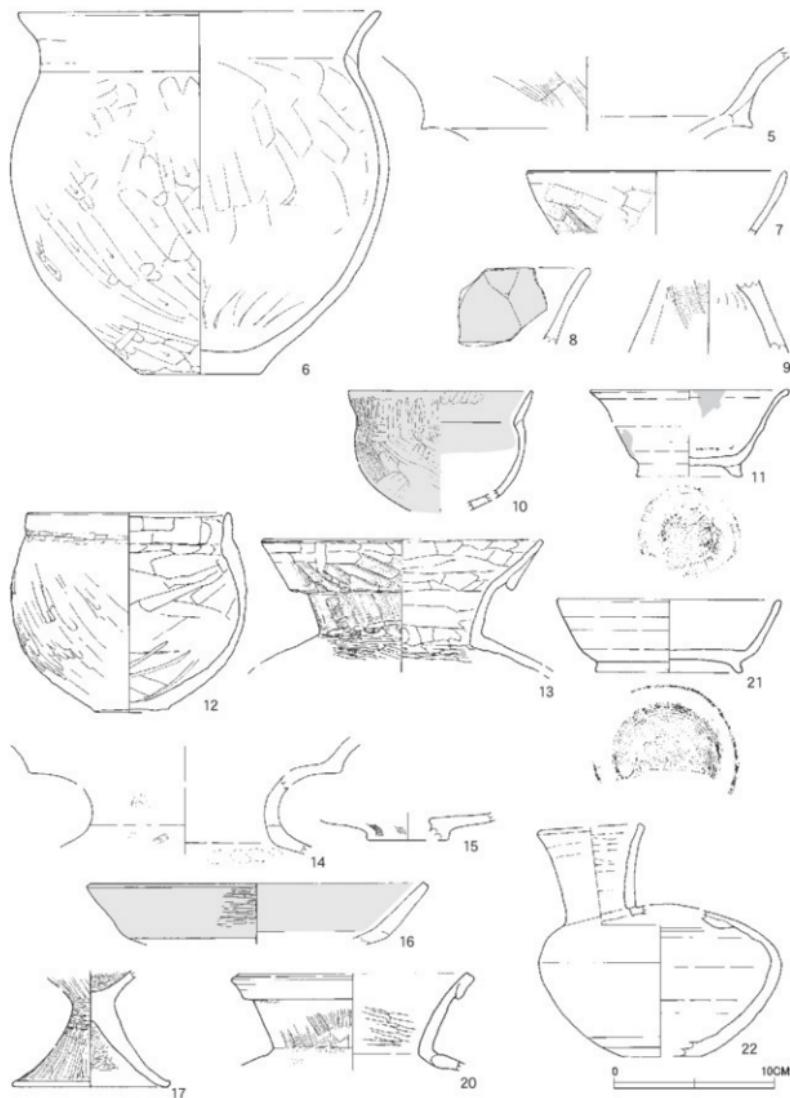
10号墳の出土遺物 墳頂部に設定したM1Tより出土した須恵器平瓶で碎片から復元している。M1Tは本墳の石室上面に相当したところから石室石材や礎床材と思われる河原石などと混在して発見されたため、石室内に副葬された遺物が搅乱されているものと想定している。器高約14cm、体部高約9.6cm、体部幅約15cm、口径6.6cmである。灰白色、淡黄色の色調、精選された胎土から湖西産の須恵器と推定され、6世紀末から7世紀前半代に置かれる。

18号墳の出土遺物 T1Tでは同墳の周溝が確認され、その覆土中から20・21が出土した。20は口縁部に粘土を貼り付けた複合口縁壺で、頭部から直線的に外反する。口径14.8cmを測る。21は須恵器高台付碗で貼付高台、底面は糸切り痕を残している。口径13.8cm、器高4.5cmを測る。8世紀末から9世紀前半と推定される。

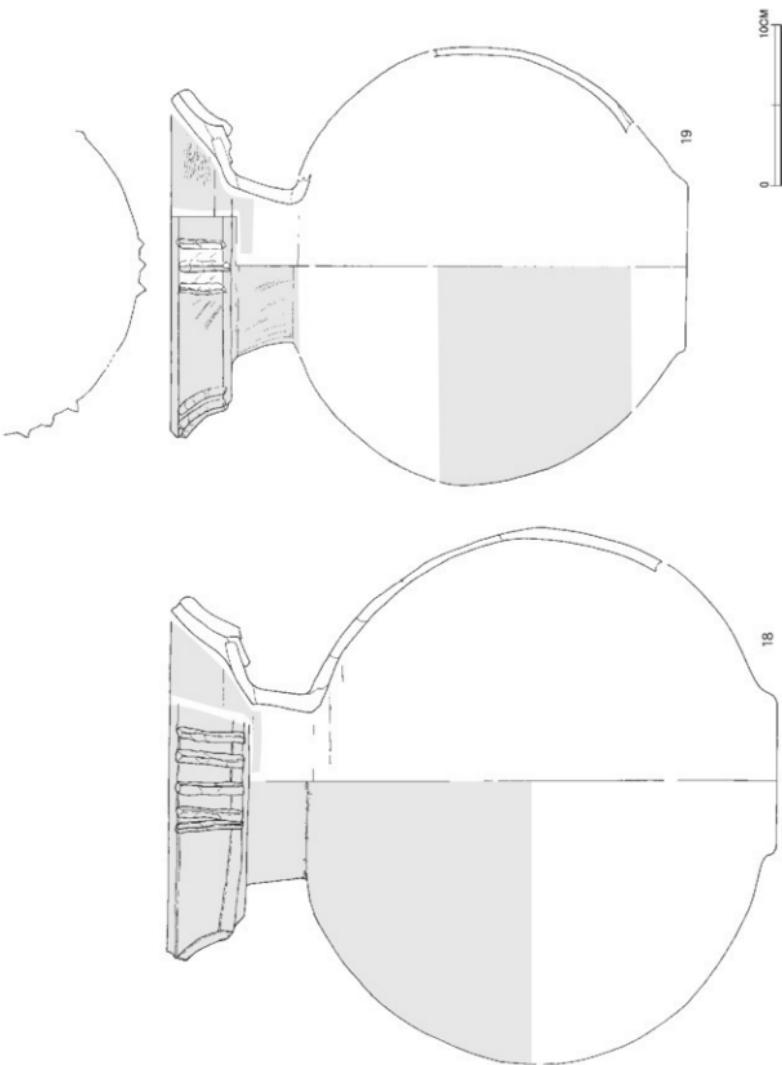
25号墳の出土遺物 (第15図) 1は鉄製の短剣である。被葬者が北頭位とすると、身上半部付近の位置から出土した。劍身・茎とも木質が良く付着しており、鞘込の状態で副葬されたものである。劍全長は19.7cm、劍身は長さ13.5cm、元幅3.0cm、先幅2.3cmであり、元厚0.7cm、先厚0.5cmを測る。身中央に鏽を造り出し、やや丸みを持った鋒に至る。身元は水平の両側と茎を明確に造り出す直截式折である。茎長6.2cm、幅1.6cmである。茎尻に目釘穴を一孔開けている。棺内での出土状態から劍とした(文18、補註6)。

2~4はコバルトブルーのガラス製小玉(白玉)である。1個完存、他は破片の状態で出土した。6は甕口縁部破片で口径は19.1cmを測る。7は壇型土器、8は底部穿孔の底部片で二重口縁壺と思われる。9は台付甕の台脚破片。10・11は壇型部の破片。12は尖頭器破片で黒曜石製である。

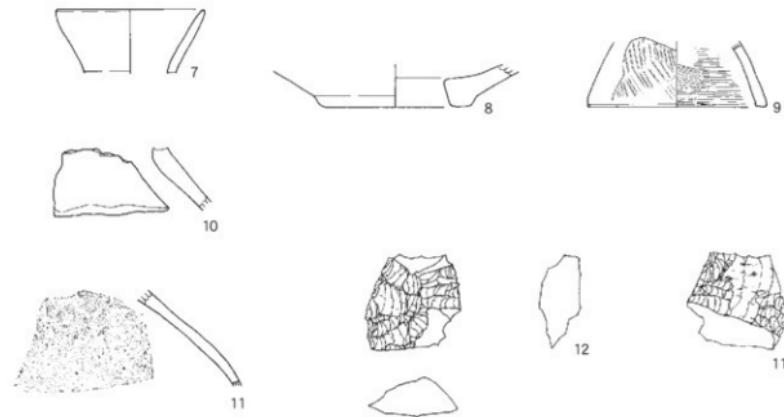
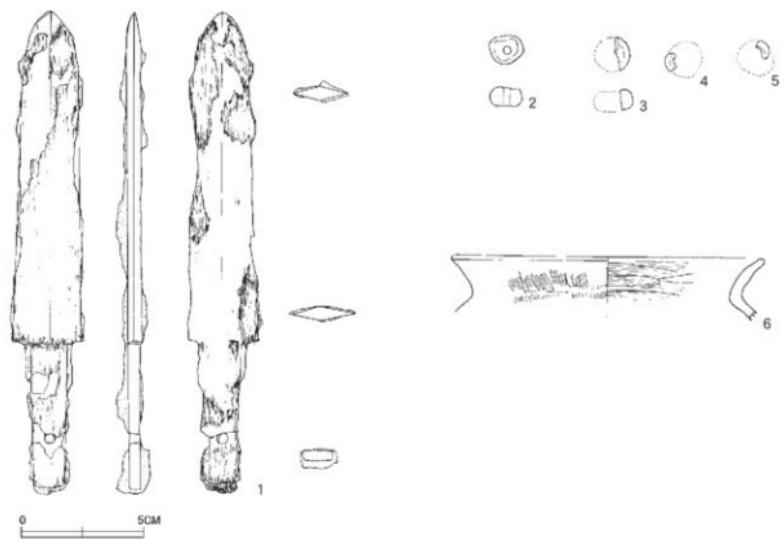
②一括出土の遺物 各トレンチから縄文時代土器が100片程出土した。遺構は確認されなかった。墳丘下や盛土中に包蔵されると思われる。早期拘系文系の稻荷台式土器、前期の織維土器・黑浜式土器、中期後半の加曾利E2~3式土器がある(写真図版14)。石器は礎器、磨製石斧、スタンプ形石器、打製石斧、磨石等があった。他に、板碑破片、波来銭〔聖宋元寶〕中国宋王朝時代、初鑄は建中靖国元年(1101年)が覆土中より出土している。



第13図 塩古墳群出土遺物



第14図 塩古墳群出土遺物



第15图 咸古墳群出土遺物

第1表 塩古墳群第1支群一覧

■埼玉県史跡

番号	古 墳 の 屬 性							
	名称	墳形	規模×m	墳丘標高 m	基底面 m	トレンチ名(調査位置) 他	出土遺物	備考
1 1号墳	前方後方墳	全長 □	35.8 21.4 13.6	84.33	80.5	A1T(後方部北側) O1T(後方部北西隅) O3T(前方部南西隅) E2T(後方部西側) F2T(括れ部西側) G1T(前方部西側) A2T(前方部南側) F3T(括れ部東側) E3T(後方部東側) G2T(前方部東側)	二重口縁壺 裏	■
2 2号墳	前方後方墳	全長 □	30.1 18.1 12.0	83.18	80	H1T(後方部北側) H0T(後方部北側) K2T(後方部東側) P1T(前方部東側) O2T(後方部東北隅) K1T(後方部西側) L1T(後方部西南隅) R1T(前方部西側) N1T(前方部西側) L2T(括れ部東側) H2T(前方部南側)	二重口縁壺 器台	■
3 3号墳	方墳	□	19	84.33	81	A1T(埴丘南側) D1T(埴丘西側) C2T(埴丘東側)		■
4 4号墳	方墳	□	9	82.08	81			■
5 5号墳	方墳	□	10	82.43	81.2	D1T(埴丘東側)		■
6 6号墳	方墳	□	9	81.55	81.4			■
7 7号墳	方墳	□	12.6	82.51	80.4	B2T(埴丘南側) E2T(埴丘東側)	複合口縁壺	■
8 8号墳	方墳	□	13	82.32	80.2	B2T(埴丘北側)		■
9 9号墳	方墳	□	8	79.43	78.6	S2T(埴丘東側)		■
10 10号墳	円墳	○	23.4	79.45	76.8	M1T(埴丘頂部) I1T(埴丘北側) Q1T(埴丘西側) M2T(埴丘東側)	須恵器	■横穴石室
11 11号墳	方墳	□	10.8	79.9	79	H2T(埴丘北側) M2T(埴丘西側)		■
12 12号墳	方墳	□	13	80.66	79	H3T(埴丘北側) M4T(埴丘東側) H4T(埴丘南側) M3T(埴丘南側)		■
13 13号墳	方墳	□	12	80.72	79.3			■
14 14号墳	方墳	□	13	81.32	79			■
15 15号墳	方墳	□	12	80.53	79			■
16 16号墳	方墳	□	不明	80.28	79.8			削平
17 17号墳	方墳	□	8	81.1	80.2			■
18 18号墳	方墳	□	13.2	82.05	80.4	T1T(埴丘西側)		■
19 19号墳	方墳	□	13.8	82.79	80.6	T2T(埴丘東側)		■
20 20号墳	方墳	□	8	81.27	80.6			■
21 21号墳	方墳	□	8	81.44	80.6			■
22 22号墳	方墳	□	12	74.22	72.7			
23 23号墳	方墳	□	12	75.1	73.1			
24 24号墳	円墳	○	24	66.62	63.6	1981年調査		
25 25号墳	方墳	□	12	74.32	73	1986年調査		
26 26号墳	方墳	□	8	72.55	70.9	埋葬主体部		
27 27号墳	円墳	○	24	61.9	60.3	1981年測量調査	須恵器鉄製品	横穴石室
28 28号墳	円墳	○	不明	60.2	59.8			削平
29 29号墳	円墳	○	8	65.72	65			
30 30号墳	円墳	○	不明	62.6	1981年調査			削平
31 31号墳	方墳	□	不明		79.8			削平
32 32号墳	方墳	□	不明		80			
33 33号墳	方墳	□	10	81.42	80.4			
34 34号墳	方墳	□	6	79.5	78.6			
35 35号墳	円墳	○	不明		62			削平
36 36号墳	方墳	□	不明	79	78.6			

第IV章 結語

第1節 塩古墳群の性格

前方後方墳を主体とする古墳群の性格 発掘調査は古墳要所の部分調査であったが、当初の目的である各古墳の規模把握と時期や性格の決め手となる発掘結果や出土遺物を得ることができた。これらの内容を以下にまとめ現時点での総括的な評価をしたい。

第1・2号墳は前方後方墳、3・5・7・8・11・12号墳は方墳、10号墳は後期の円墳であった。古墳の築造については、各古墳は旧地形を削り出して墳丘基底面とし、墳丘を取巻く地山部分の掘削土を盛土して墳丘を築く。1号墳の墳丘では1.5m以上切り出された旧地表（基壇）上に盛土されたものである。盛土確保のために周溝を深く掘ることは地山岩盤のため敢えて行わず、水平方向に掘り広げることで土量を確保している。そのため近接している古墳では周溝の外側を残さず削り取ってしまい、一見周溝を共有しているかに見える。1・2号墳ではこの傾向が強く、各古墳の築造面（墳丘基底面）がほぼ標高80m付近となっている。これは1号墳の築造に至ってその周溝底部を古墳築造の基底面とする意図で一面に押し広げているのではないかと思われる（文18、20、21）。志戸川南遺跡（文43）、石蔭B遺跡（文35）のように既存の周溝を利用して区画溝とする意図とは異なる事情が塩古墳群の場合に見える。ただ、単独墳を意図して1号を築造したものかは不明だが、精密な企画性と高い墳丘高を持つことは、高塚墳を志向し1号墳が築かれていることは確かである（文25、26、27）。

出土遺物の時期からおよそ1支群の古墳群の消長は3世紀末から4世紀中にかかる変遷をしていると推定される。定点として二重口縁壺の出土した1号墳の時期を遡間Ⅲ式1～2段階（布留式0～1段階）に置かれるものとした（文29、46、47、46）。この二重口縁壺は頭部が屈曲する小型のものとハケメ調整を残す大型の二種がある。前者はその形態から二重口縁壺の初期のものとみられ、庄内Ⅱ～Ⅲ式段階に置かれるところから、1号墳築時に伴う設置が考えられる。屈曲する頭部片は先行する3号墳にもみられる。後者は口縁に円孔が一对あり、遡間Ⅲ式1の古段階（庄内Ⅳ式～布留式0）に比定される本庄市鷺山古墳の二重口縁壺にも同様の円孔を持つ（文11）。共に粗いハケメ調整を残しており、墳丘上に多数置並べること意図して製作されたもので埴輪的な性格がうかがえる。この大型の二重口縁壺は、追祭祀により供えられたと考えられる。

東国では古式土師器の二重口縁壺と、出現期古墳のほとんどが前方後円形ではなく前方後方形という墳形を採用している点は本地域のような小地域においても古墳時代社会への移行という在地社会の成熟状況を示している。

2号墳の有段口縁壺は布留式Ⅱ～Ⅲ以降の特徴を示す。7号墳の二重口縁壺では、口縁部外面に粘土貼付による棒状付文装飾がみえ、群馬県前橋市荒砥北原1号周溝墓出土例（文28）も棒状付文であるが、埼玉県東松山市諫訪山29号墳（文12）出土の大廓式系の有段口縁壺では沈線となることから、1号墳に先行する時期のもので遡間Ⅱ式（庄内Ⅱ～Ⅲ式）に置かれると思われる。対比しづらいが3世紀後半から4世紀初頭に収まるものであろう（文6、15、11、25、26、27、29、31、36、38、39、42、46、47、49。）。

塩古墳群の位置・地形・歴史的な特徴として次の諸点が挙げられる。塩古墳群は43°西に傾く狸塚丘陵尾根に規制され、尾根の方位に主軸を合わせて大略北から南へ築造配列された。

大型の方墳と小方墳、前方後方墳と小方墳が対であるかのような3群3単位の集合がみられ、3号→1号→2号へ至る三世代以上の首長が葬られているものと推定された。

25号墳は丘陵が連接する鞍部に立地する古墳でⅠ支群とⅣ支群、集落域と墓域との境界部に位置する。木棺直葬の土坑墓が確認され、小規模古墳の主体部構造を推測させる（文18、20、25）。1号墳などの大型墳の埋葬主体部は未解明であるが、堅穴状の掘方を持つ土壙墓であると思われる。Ⅰ支群内の水平分布をみると高位群と中位群、下位群の差が改めて確認され、高位・中位群は古墳時代前期を、下位群は古墳時代後期を中心とする。

塩古墳群は滑川沖積地の最奥部に開けた沖積地を望む北辺一帯の丘陵部に展開する古墳時代前期を中心とする初期の群集墳である。1号墳の出現が、当地方の塩、古里、立野古墳群の形成に至る画期をなすもので、旧地形の最高所に墳丘の位置する3号墳から高い企画性を持つ1号墳への推移は方形から前方後方形への首長墓の変化と認められ、比企丘陵北縁に築かれた最初の小首長墓として、古墳時代社会の始りを期すものと思われる。第Ⅰ支群は弥生時代以来、谷津田の開墾を発展させてきた集団の中心となる者のなかから、沖積地の開墾を成し遂げた人物とその成長を祀るために、塩地区の丘陵上に弥生時代以来の伝統的な方形墳に加え前方後方形の高塚古墳を築いたものである（文29、52、53）。丘陵頂部に占地し、高塚墳を志向する意識がうかがえ、古墳時代社会へより傾斜していると考えられ、当地方における出現期古墳の実例として貴重である。なお、低地で発見される前方後方形周溝墓群とも、そのあり方は変わらない集中状況のように見えるがこれは地形上の制約が大きい。

また、10号墳は後期の円墳でⅠ支群から約200年経て築造されたものであり、同時期の古墳はⅡ支群、Ⅲ支群、尾根支群（古里古墳群）に多く分布していることから、Ⅰ支群内に散えて築造しているものである。その理由を計り知れないが、Ⅰ支群は開拓地を最も良く眺望できる高所に築かれた三代余の首長の奥津墓で、これを父祖靈の眠る地と考え、後代も聖地として神聖視されていたのであろう（文33、36、42）。

第2節 保存整備に向けて

塩古墳群は、近代以降行政界の錯綜する地となり、江南・嵐山・滑川・川本・寄居・小川の各自治体が盆地を取巻いている。主要な景観の多くは丘陵と畑と谷田の農地で、谷奥のため池（沼）が多く、丘陵裾の斜面には畑と農家集落が展開している。塩古墳群中を峠として通行する県道熊谷小川線が塩古墳群に至る主要アクセス道で、この東西道に取り付くように生活道が南北に走る。

史跡としての塩古墳群は地域の歴史空間の大きな一部であり、この環境を維持することが古墳と地域の生活を保障するものと考えられる。古墳の分布する塩地区の尾根から北西斜面は防風林と薪炭林として今も健在で、いわゆる「里山」の風土をよく残している地域である。里山の文化的価値はよく語られているところで、塩古墳群の展開するこの地域の旧江南町、また隣り合う滑川町・嵐山町とともに生活が組み立てられているといつてよい。滑川に面した滑川町和泉から旧江南町塩そして嵐山町古里の地域は古代または中世から近世の歴史的景観や風土を濃厚に伝えている。少なくとも現在の谷津田の景観、水利慣行、耕地と居所・墓地・寺社・路、そして古墳は何の違和感もなく、現地の人的心と生活に溶け込んでいる。

本来、古墳を保存することは狭い行政の役割だけではなく、地域の実生活者としての住民の役割もあると思われる。両者がそれぞれの視点と立場から関わり合うことが必要である。旧江南町では、総合振興計画に

より塩古墳群の史跡公園整備を計画し、史跡地を中心に公有地化したが、整備基本計画の実施は未だ進んでいない。すでに十数年林帯の整備と保護に努め、薪炭材として切るべき木の循環を図っている。里山の保存が古墳を守る地域の知恵でもあり、循環する自然の中に変わらず存在する古墳の姿は神聖観や聖地感を湧出してきた。目指す方向は古墳の保存と公園の整備であり、その手法は現状の林地を維持する中で生み出されてくる。今後、歴史資源（塩古墳群）と里山資源をより活用するアイデアや動きが各方面から生まれ、育つことを働きかけ、この地が後世へ守り伝えるべき価値ある空間との理解をさらに伝える必要がある。

補 註

1. (文27) の中で、方形周溝墓の方形埴丘の一辺の長さに注目して、辺長24mを前後して、以上を古墳、以下を埴丘墓と区分できるとし、前方後方墳では後方部の埴丘辺長を対象としている。この場合、塩古墳群は前方後方形周溝墓と方形周溝墓群に比定される(文52、53)。しかし、多く削除されてしまっている方形周溝墓群の場合、高厚埴築造の意識は薄く、また、前期古墳が高所を好みで占地し、仮器としての二重口縁蓋の使用を考えると塩古墳群は古墳として良いように考える。
2. 塩古墳群に先行する山の根古墳(文21)・鷲山古墳(文11)は、いずれも後方部埴丘の規模は24m以上である。丘陵上に立地する單埴築、規模の点、立地の点からも独立、特定個人墓の輩出と見ることができ塩古墳群の様相と異なる。
3. 塩古墳群の造営集団の集落は、塩西遺跡、諸々谷遺跡、丸山遺跡などの古墳築造地の後背地斜面から低地部に立地している。明賀遺跡・塩西遺跡では元屋敷系の土器やS字甕など東海系の土器が少なからず出土している。
4. 塩古墳群の埴丘構築状況は、旧地形の地山を削り出し埴丘基底部として確保できるので、盛土は少なくすることができる。盛土の方法は未解明だが、1号墳の場合2m以上の盛土が遺存しており、堅敏な積み方がなされているのだろう。また、基底とした見かけ上の水平面は埴丘の高さを際立たせる効果を持つ(文18、20)。
5. 現在指定地域内に2基の前方後方墳が確認されるが、南側にも古墳があった可能性がある。地山基盤の標高約80m付近が、古墳築造の基底面としていると考えられることから、18号から25号埴間には、もう1、2基の古墳築造の余地が認められる。また、Ⅲ支群(西原)では80m付近の平坦地がゴルフ場に開発されており、上位群の古墳残丘が残っていることや下位群の分布から、この上位群には前方後方(円)墳等の大型埴築造の余地があり、その可能性がある。
6. 古墳とその周辺で火を焚く祭祀跡が想定される遺構として、保内山王山古墳1号墳、11号墳から焼土塙が発見された。幅1.9×0.9mほどの土壤で焼土炭化物が多量に詰まっていた。古墳脇に位置することから築造時に行われた祭祀状況を示すと考えられている(文18)。
7. 檀先の可能性を残しつつ鉄劍とされる保内山王山11号埴埋葬施設出土例は全長28.8cm、身長22.9cm、茎長5.9cm、身幅3cmである。塙側とは身幅、茎長がほぼ等しいが身長差が10cmある。劍か檀かの判断は、全長と茎長の比率も想定されているが、出土状態での柄の有無確認が重要であり、檀側は後代の刀子に近い長さとなっている点からも劍と想定する。
8. 嶽山町大木前遺跡(文32)から斜縁二神二獸鏡が出土した。本例は蓮座と神像と詩仙と獣像の一部が残っていた。因像表現や鑄上がりなどから微鏡と判断されている。現鏡は漢式鏡で二世紀後半から3世紀前に比定され、朝鮮半島、中國内での出土ほか、日本では前期古墳でも古期の古墳が発見されている。本例は4世紀中頃の倭国製と想定されているが、同種鏡の国内出土古墳には大阪府安曇宮山古墳(3世紀後半)、奈良県桜井茶臼山古墳(3世紀後半~4世紀初頭)、滋賀県安土瓢箪山古墳(4世紀中葉)、などの出土が知られる。また、東日本でも山梨県小平古墳(前方後方墳 4世紀中葉)などのように小規模古墳からも出土している。大木前遺跡自体の鏡を含めこの鏡式の鏡が塩古墳群に副葬されていた可能性は高いと思われる。小平沢古墳は全長45mの前方後方墳であるが发掘により粘土標あるいは直棺葬とされ、出土した二神二獸鏡は故意に破砕されたと考えられている(文51)。

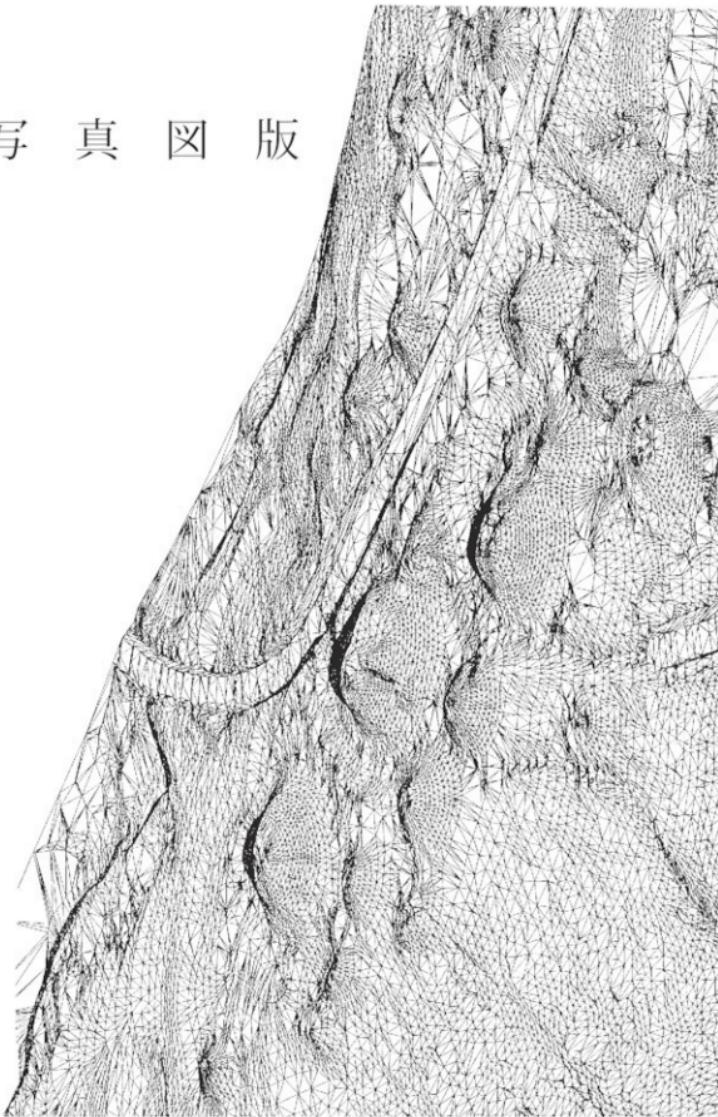
なお、塩古墳群と大木前遺跡は直線で約3km、谷筋ルートでも4kmほどで至る。市ノ川支流柏川の開削した谷津斜面に作られた平安時代住居跡より出土した。大木前遺跡は古代の隣郷の範囲であろうが、村堂を想像させる古瓦散布地のほか目立った遺跡は見当たらず、古墳も知られていない。鏡の年代から約五百年の時期差があり、もたらされた事情は推測の域を出ないものの、古墳副葬品から採取され、銅素材として小鍛冶を行っていた堅穴住居にもたらされたかもしれない。鑄潰され残されたのは、鏡背の神像図そのものを神仏として祀っていたからであろう。

(文責 新井 端)

引用・参考文献一覧

No.	著者・機関名	年次	論文・図書名・巻号数
1	埼玉県教育委員会	1960	『古墳調査報告書 第四編 大里郡 熊谷市・深谷市・古墳調査』
2	埼玉県教育委員会	1962	『埼玉県遺跡地名表』
3	埼玉県教育委員会	1963	『塙古墳群』『埼玉県指定文化財調査報告書』第3集
4	埼玉県教育委員会	1975	『埼玉県遺跡地名表』
5	金井琢良一	1979	「比丘地方の前方後円墳 一北武藏の前方後円墳の研究一」『埼玉県立歴史資料館紀要』第1号
6	田口一郎 他 高崎市教育委員会	1981	『元島名跡古墳古墳』 高崎市文化財調査報告書 第22集
7	新井 端 江南町教育委員会	1982	『塙古墳群の分布について』『塙前遺跡』 江南村埋蔵文化財調査報告書 第3集
8	新井 端 江南町教育委員会	1983	『塙西遺跡』 江南村遺跡群Ⅰ
9	菅谷浩之 児玉町教育委員会	1984	『北武藏における古式古墳の成立』 児玉町資料調査報告 古代第1集
10	新井 端 江南町教育委員会	1986	『新山遺跡』 江南町内遺跡群 Ⅲ
11	埼玉県黒史編纂室 編	1986	『埼玉県古式古墳調査報告書』
12	松原一 他	1987	『源訪山33号墳の研究』
13	埼玉県黒史編纂室 編	1987	『荒川流域の方形周溝墓』『荒川 人文Ⅰ』 荒川総合調査報告書 2
14	植木弘 嶺山町道跡調査会	1987	『古里古墳群』 嶺山町道跡調査会報告 2
15	坂野和信 岐崎玉埋蔵文化財調査事業団	1987	『下道添遺跡』 岐崎玉埋蔵文化財調査事業団報告書 第67集
16	新井 端 江南町教育委員会	1989	『塙西遺跡』 江南町文化財調査報告書 第9集
17	川口 錠 岐崎玉埋蔵文化財調査事業団	1989	『西原遺跡』 岐崎玉埋蔵文化財調査事業団報告書 第53集
18	甘粕 建 他 三堀市教育委員会	1989	『保内山王古墳群』
19	大谷 敦 埼玉県教育委員会	1991	『万古下原』 埼玉県埋蔵文化財調査報告 第18集
20	小林隆行 新潟県長岡町教育委員会	1993	『越後山谷古墳』 新潟大学考古学研究室
21	埼玉県教育委員会	1994	『埼玉県古墳分布詳細調査報告書』 埼玉県立さきたま資料館 編
22	佐藤康二 岐崎玉埋蔵文化財調査事業団	1994	『大田山西遺跡』 岐崎玉埋蔵文化財調査事業団報告書 第138集
23	新井 端	1995	『埼玉県江南町・塙古墳群の調査』『日本考古学年報』 46
24	江南町・塙野博 他	1995	『江南町』 資料編 I 考古
25	東海考古学フォーラム 編	1995	『前方後方墳を考える』
26	利根川草彦 埼玉県立さきたま資料館	1995	『二重口縁小古考(上)(下)』 調査研究報告 第6集 第8集
27	坂本和俊 東北・関東前後方円墳研究会	1996	『武藏の前方後円墳』 東北・南東における前方後円墳の編年と発掘 発表要旨資料
28	福田 聖 山岸良二編	1996	『埼玉県の方形周溝墓』『関東の方形周溝墓』 同成社
29	増田逸郎 埼玉県立さきたま資料館	1997	『古墳出発期の北武藏一前方後方墳成立の要因一』 調査研究報告 第10集
30	植木 弘 岐崎玉道跡調査会	1998	『行司免造跡』
31	東海考古学フォーラム 編	1998	『土器・墓が語る 美濃の独自性 ～弥生から古墳へ～』
32	森田安彦 江南町教育委員会	1999	『塙古墳群 掘削27号墳発掘調査報告書』 第12集
33	宇野隆夫 美郷町教育委員会	1999	『象鼻山1号古墳 第3次』 美郷町埋蔵文化財調査報告書 第3冊
34	大谷 敦 金子直行	2001	『大木前 小栗家 小栗 日向』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第259集
35	佐藤忠雄 国岡町教育委員会	2003	『石跡B 遺跡』 国岡町史編纂調査報告 第1集
36	向原崇美 海老名市教育委員会	2003	『秋葉山第3・4号墳発掘調査報告書 第10~12次調査』
37	江南町・塙野博 他	2004	『江南町史 通史編上巻』
38	植木文雄 他 能登川町教育委員会	2004	『神郷鬼屋山古墳』 能登川町埋蔵文化財調査報告書 第55集
39	上福岡市教育委員会	2004	『埼玉指定史跡 様現山古墳群』
40	奈良県立懇原考古学研究所付属博物館 編	2004	『前方後方墳 ～もう一人の主役～』 秋季特別展
41	新井 端 墓原名彦 江南町教育委員会	2005	『立野古墳群』 江南町埋蔵文化財調査報告書 第14集
42	赤坂次郎 犬山市教育委員会	2005	『史跡 東之吉古墳調査報告書』 犬山市埋蔵文化財調査報告書 第2集
43	長瀬俊康 美里町教育委員会	2005	『南志戸川遺跡・志戸川古墳・志戸川遺跡』 美里町道跡発掘調査報告書 第16集
44	大阪市立大学日本史研究室	2005	『塙井葉白山古墳の研究』 大阪市立大学考古学研究報告 第2冊
45	大沢伸啓 足利市教育委員会	2005	『藤本根音山古墳発掘調査報告書Ⅰ』 足利市埋蔵文化財調査報告 第52集
46	比田井克仁 雄山閣	2005	『古墳出発期の土器交流とその原理』
47	古屋紀之 雄山閣	2005	『古墳の成立と葬送祭祀』
48	嵯崎玉埋蔵文化財調査事業団	2007	『下田町遺跡 IV』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第320集
49	植木文雄 学生社	2007	『「前方後方墳」出現社会の研究』
50	江南町・栗原口万吉 他	2007	『江南町史 自然編3 地形地質』
51	山梨県・坂本美夫	2007	『小平沢古墳』『山梨県史 資料編I 考古 (遺跡)』
52	太田博之	2009	『武藏北部の首長墓』『武藏と相模の古墳』 季刊考古学別冊 15 雄山閣
53	新井 端	2009	『塙古墳群』『武藏と相模の古墳』 季刊考古学別冊 15 雄山閣
54	小林 高 寄居町教育委員会	2010	『東伴陽道跡 第7次 墓原稲荷塚古墳』 寄居町道跡調査会報告書 第33集
55	新井 端 斎谷市原谷道跡調査会	2010	『原谷遺跡 寺内道跡10次 中島道跡2次 西道跡3次 一本木前道跡6次』

写 真 図 版



塩古墳群第1支群 3次元地形測量図

図版 2



塙古墳群第1支群航空写真



1号墳前方部から



1号墳E 3 T



1号墳G 2 T



1号墳F 2 T



1号墳A 1 T 遺物出土状態



1号墳A 1 T 遺物出土状態



1号墳A 1 T 周溝内礫



1号墳A 1 T 遺物出土状態

図版 4



1号墳O 1 T後方部西北隅



1号墳A 1 T周溝外より



1号墳F 3 T



1号墳G 1 T



1号墳A 2 T



1号墳G 2 T



1号墳O 3 T前方部東南隅



1号墳後方部



2号墳K 2 Tの設定



2号墳前方部



2号墳K 2 Tの発掘



2号墳O 2 T後方部東北隅付近



2号墳K 2 Tの完掘状況



2号墳N 1 T前方部



2号墳K 2 T保護砂入



2号墳N 1 T前方部

図版 6



2号墳O 2 T後方部東北隅埴丘



2号墳L 1 Tくびれ部西側



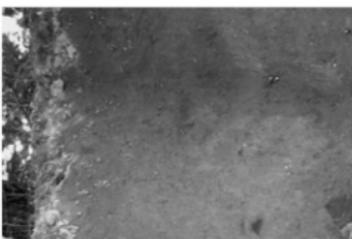
2号墳P 1 T前方部東南隅



2号墳H 1 T（2号-8号墳間）



2号墳K 1 T



2号墳H 1 T後方部埴丘裾遺物出土状態



2号墳L 2 Tくびれ部東側



2号墳L 2 T調査風景



3号填 草刈り・かたづけ



3号填C 2 T



7号填E 2 T (7号—1号填間)



7号填E 2 T 遺物出土状態 (第14図18)



7号填E 2 T 遺物出土状態



3号填D 1 T



3号填D 1 T (3号—5号填間)



3号填A 1 T (1号—3号填間)

図版 8



8号填H O T



7号填B 2 T (7号-8号填間)



9号填S 2 T



9号填丘



10号填I 1 T



10号填J 1 T



10号填M 1 T



10号填Q 1 T



11号填H 2 T (11号—2号填間)



11号填M 2 T (11号—10号填間)



12号填M 4 T



12号填M 3 T



12号填P 1 T (12号—2号填間)



12号填H 4 T (12号—34号填間)



19号填T 2 T



18号填T 1 T

図版 10



25号填周溝確認状況



25号填調査時現況



25号填周溝土層 E E'



25号填周溝確認状態



25号填周溝確認状況



25号填調査前現況



25号填周溝土層 F F'



25号填周溝土層 D D'



25号填埋葬主体部確認状況



25号填発掘状況



25号填埋葬主体部確認状況



25号填周溝完掘状況



25号填埋葬主体部確認状況



25号填完掘状況



25号填埋葬主体部



25号填埋葬主体部

図版 12



25号墳埋葬主体部遺物出土状態



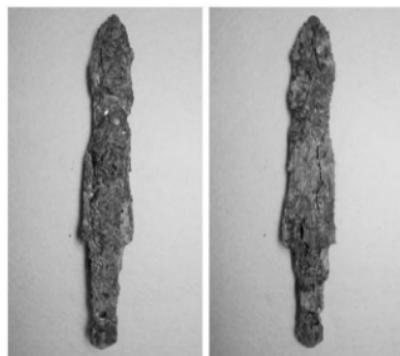
25号墳墳丘下土壤



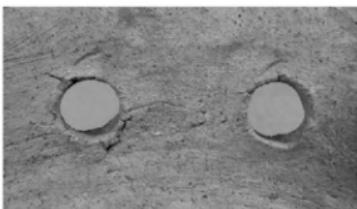
25号墳埋葬主体部遺物出土状態



25号墳調査終了



25号墳埋葬主体部出土鉄剣（表裏面）・同ガラス玉



口縁部円孔



1号填出土土器（第12図1、上・同2、下）



1号填出土土器（第12図3）同底部

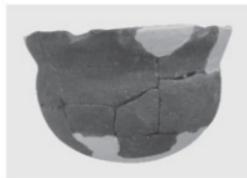


第12図4、13図5・7～9・14～15
1号填出土土器片

図版 14



1号填出土土器 (第13図6)



1号填出土土器 (第13図10)



2号填出土土器 (第13図12)



2号填出土土器 (第13図20)



8号填出土土器 (第13図17)



10号填出土土器 (第13図22)



7号填出土土器
(第14図18) 紹部



縩文土器



報告書抄録

ふりがな	しおこふんぐん							
書名	埼玉県指定史跡「塙古墳群」の調査							
副書名	熊谷市内遺跡（旧江南町）の発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	熊谷市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第10集							
編集者名	新井 端							
編集機関	埼玉県熊谷市教育委員会							
所在地	〒360-0107 熊谷市千代329番地 熊谷市立江南文化財センター TEL048-536-5062							
発行年月日	西暦2011（平成23）年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード	世界測地系	調査期間	調査面積 (m)	調査原因		
市町村	道路番号	北緯	東緯	調査担当者				
塙古墳群 監理番号 (2702)	くまがやし しれあがしうら す 熊谷市塙字正木 624番地他	11202	64-061	36° 6' 56"	136° 19' 47"	1986.7.17 ～ 1986.8.15 新井 端	2,000	道路改良
塙古墳群 監理番号 (4521)	くまがやし しれあがたぬきつか 熊谷市塙字狸塚 633番地2	11202	64-061	36° 6' 56"	136° 19' 47"	1991.7.8 ～ 1991.7.15 新井 端	125	水道工事
塙古墳群 監理番号 (5122)	くまがやし しれあがたぬきつか 熊谷市塙字狸塚 348-1, 347-1番地	11202	64-061	36° 6' 56"	139° 19' 14"	1993.2.23 ～ 1993.3.31 新井 端 森田安彦	300.00	範囲確認 調査
塙古墳群 監理番号 (5505)	くまがやし しれあがたぬきつか 熊谷市塙字狸塚 347-1番地	11202	64-061	36° 6' 53"	139° 19' 0"	1993.11.8 ～ 1993.12.17 新井 端 森田安彦	200.00	範囲確認 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
塙古墳群	古墳群	古墳時代 前期	前方後方墳・方 墳周溝・土壙墓	縄文土器・石器 土器	丘陵尾根に築造された前後方墳2 基と方墳10数基からなる密集状況 の古墳群（第1支群県史跡部分） 出土土器から古墳時代前期の築造 と推定。25号墳では、埋葬主体部 を検出。鉄剣、ガラス小玉出土			

埼玉県熊谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第10集
埼玉県指定史跡「塩古墳群」の調査

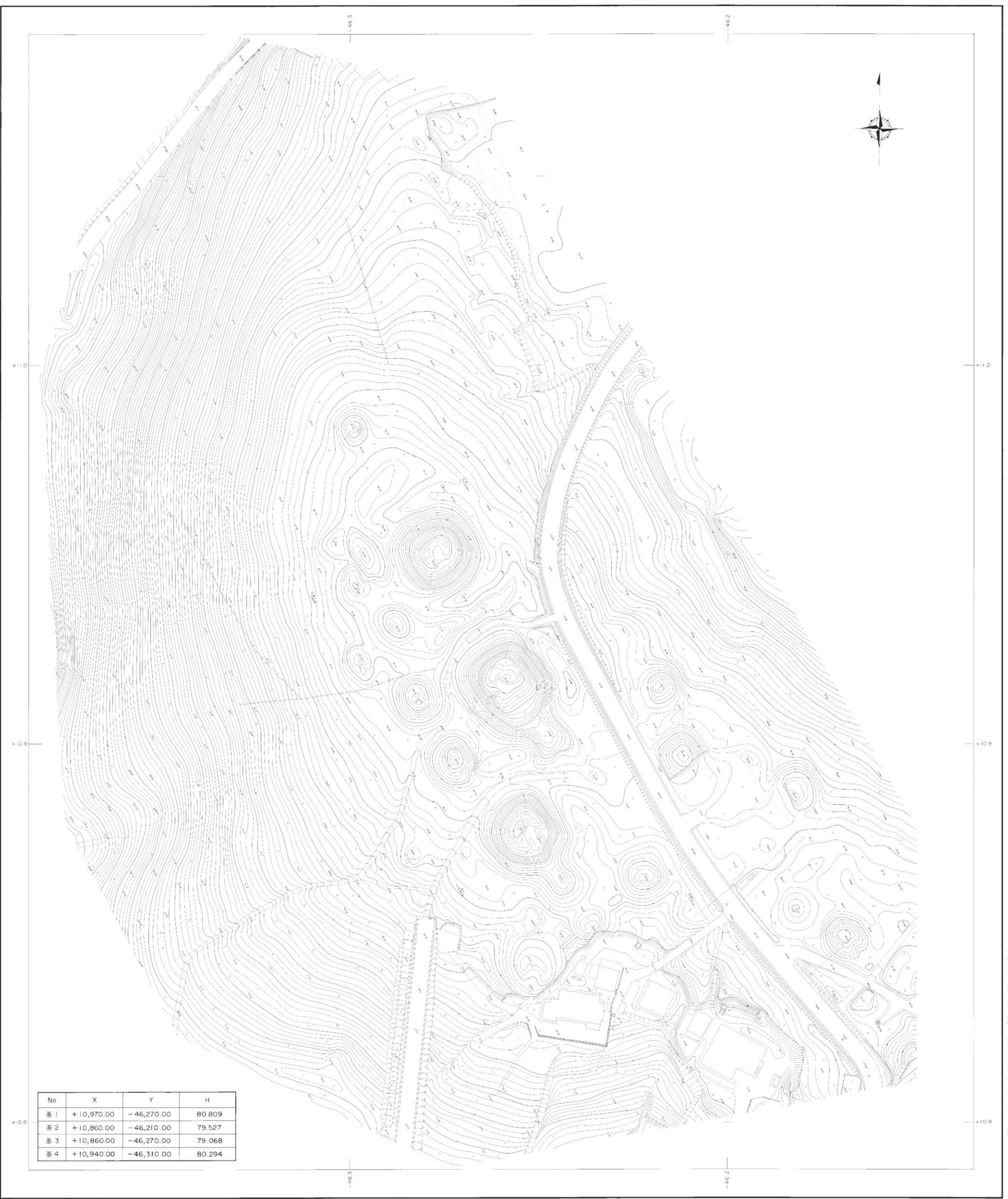
熊谷市内遺跡（旧江南町）の発掘調査報告書

平成23年3月25日 印刷
平成23年3月31日 発行

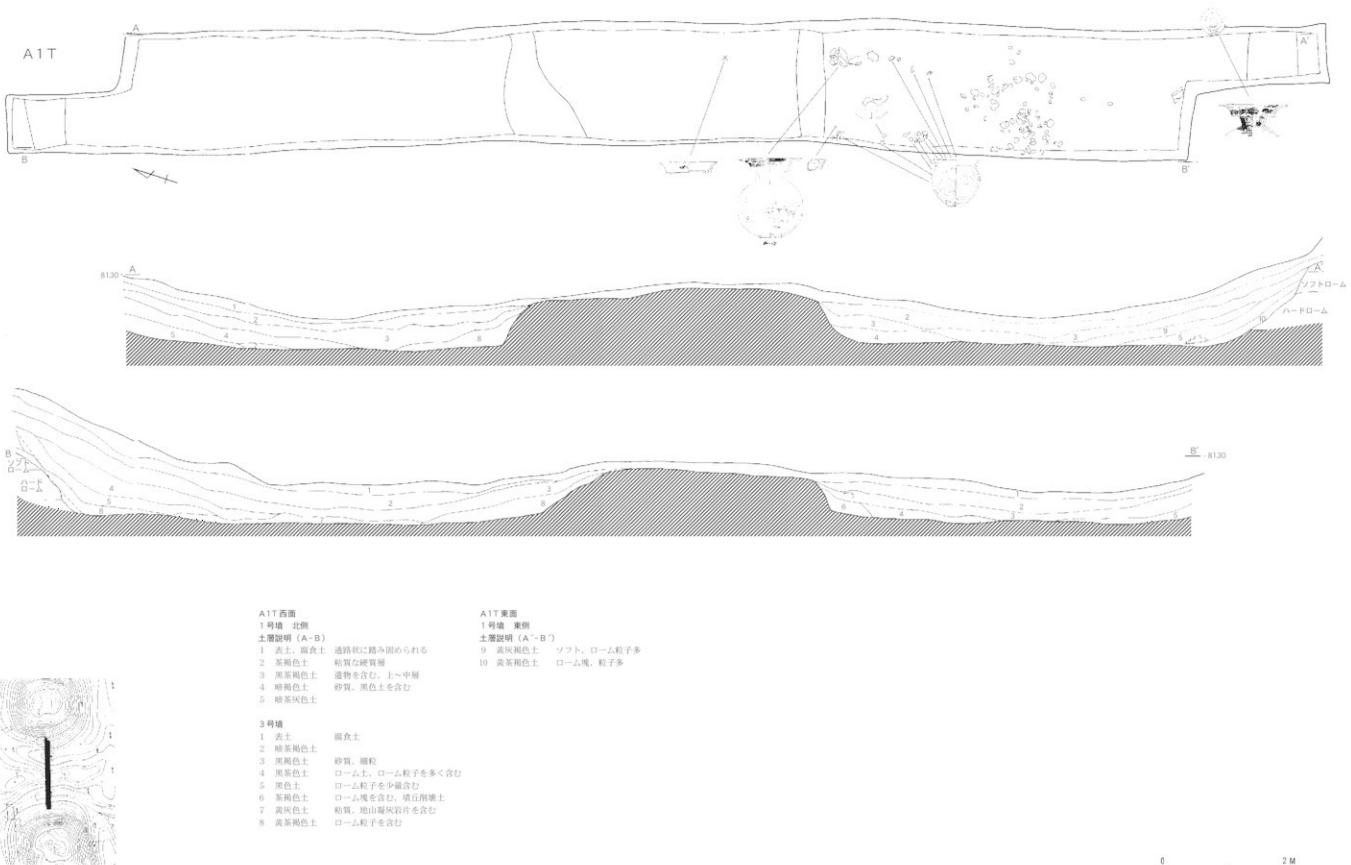
発行／埼玉県熊谷市教育委員会
代表 〒360-8601 埼玉県熊谷市宮町二丁目47番1
電話 048-524-1111

印刷／朝日印刷工業株式会社

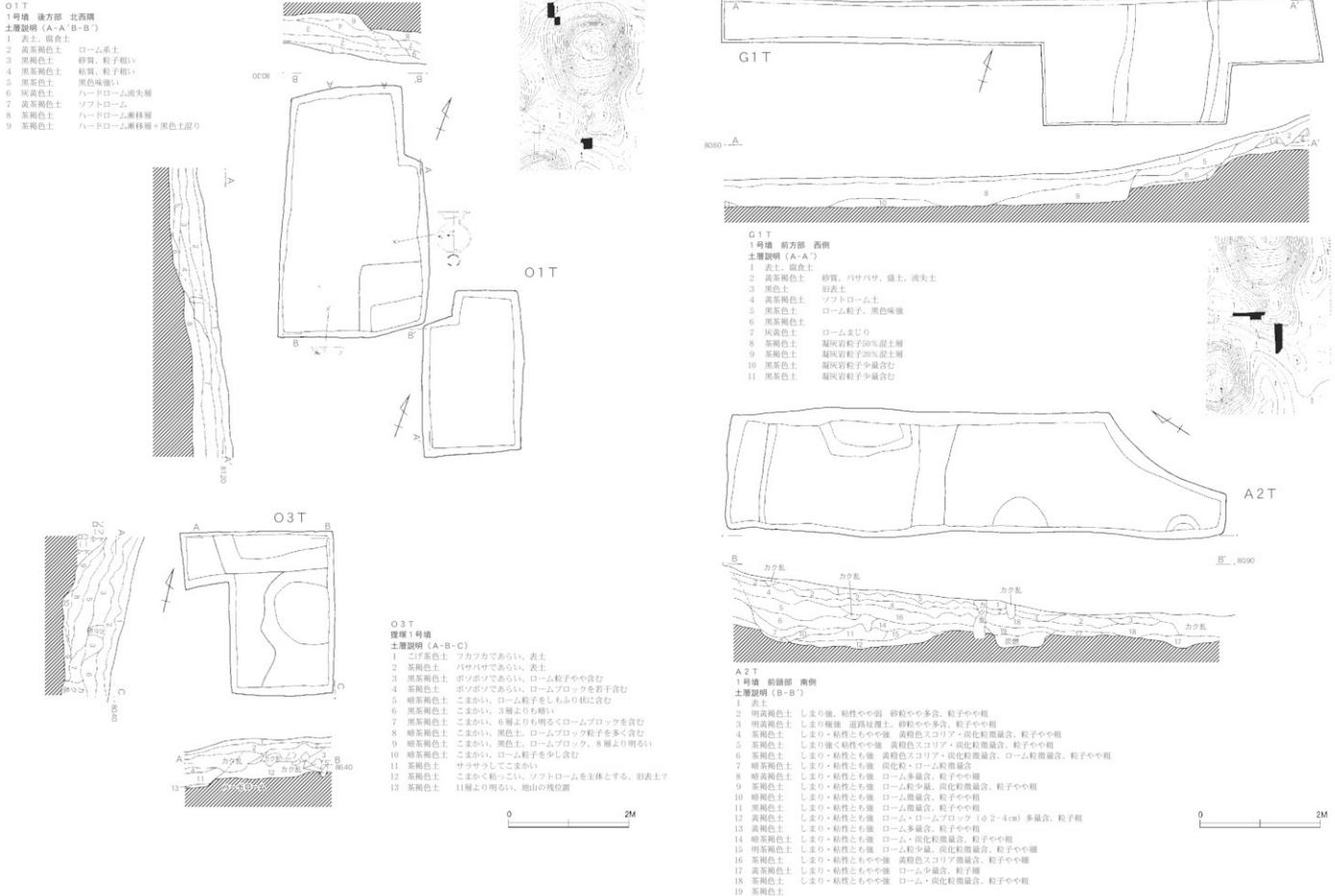
塩古墳群（第一支群）平面図



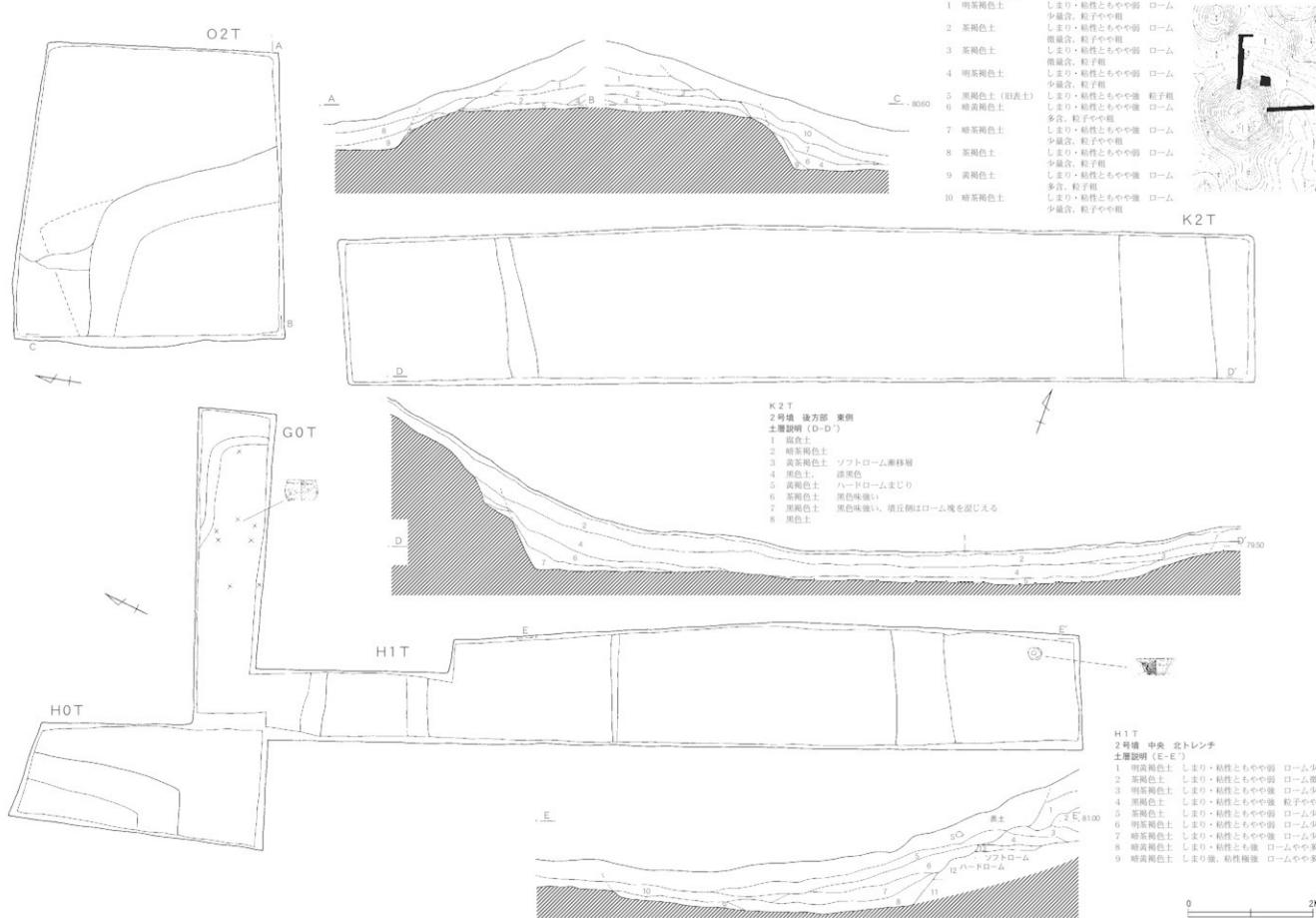
No	X	Y	H
基1	+10,970.00	-46,270.00	80.809
基2	+10,860.00	-46,210.00	79.527
基3	+10,860.00	-46,270.00	79.068
基4	+10,940.00	-46,310.00	80.294



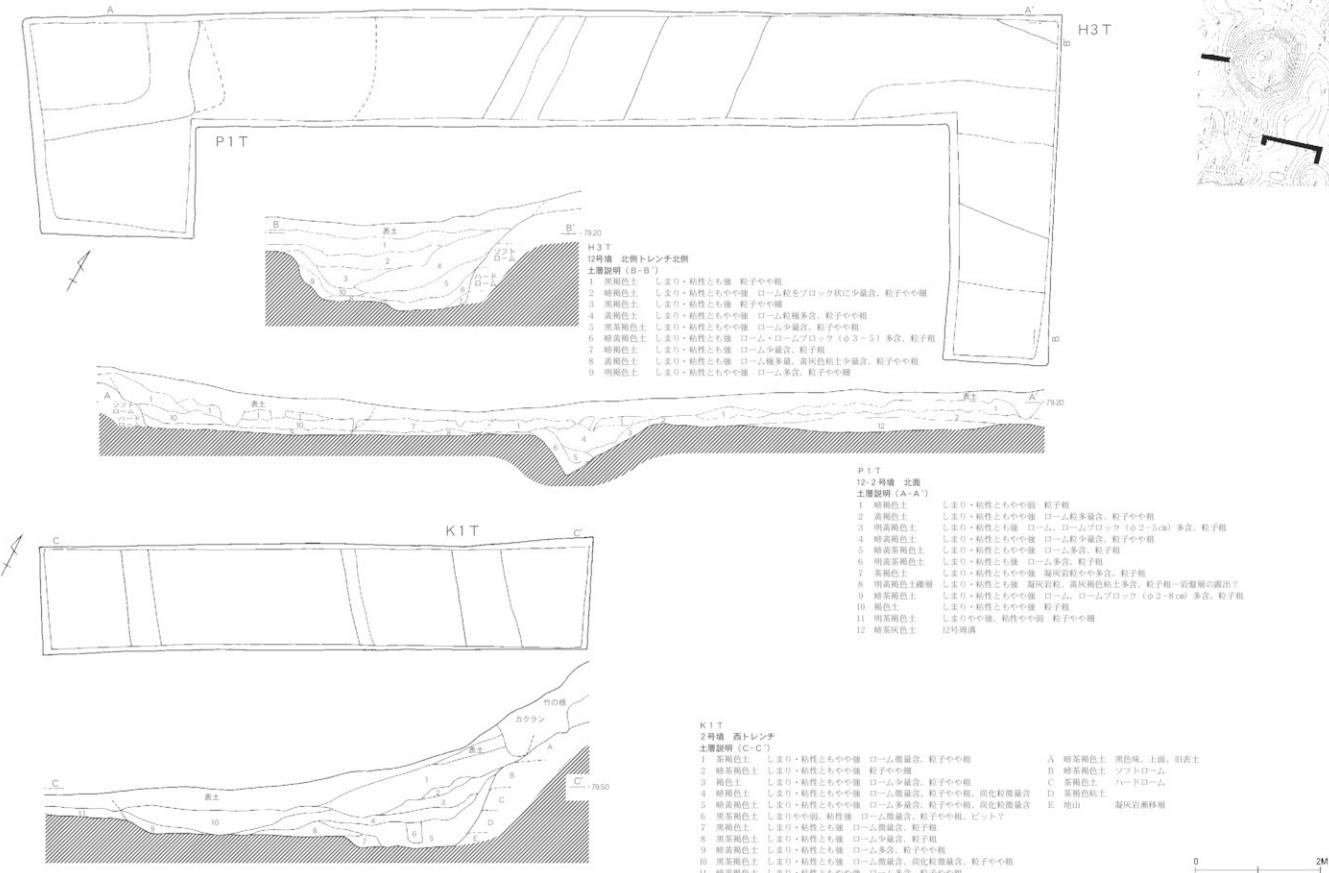
別第1図 1・3号墳A1T平面・土層図



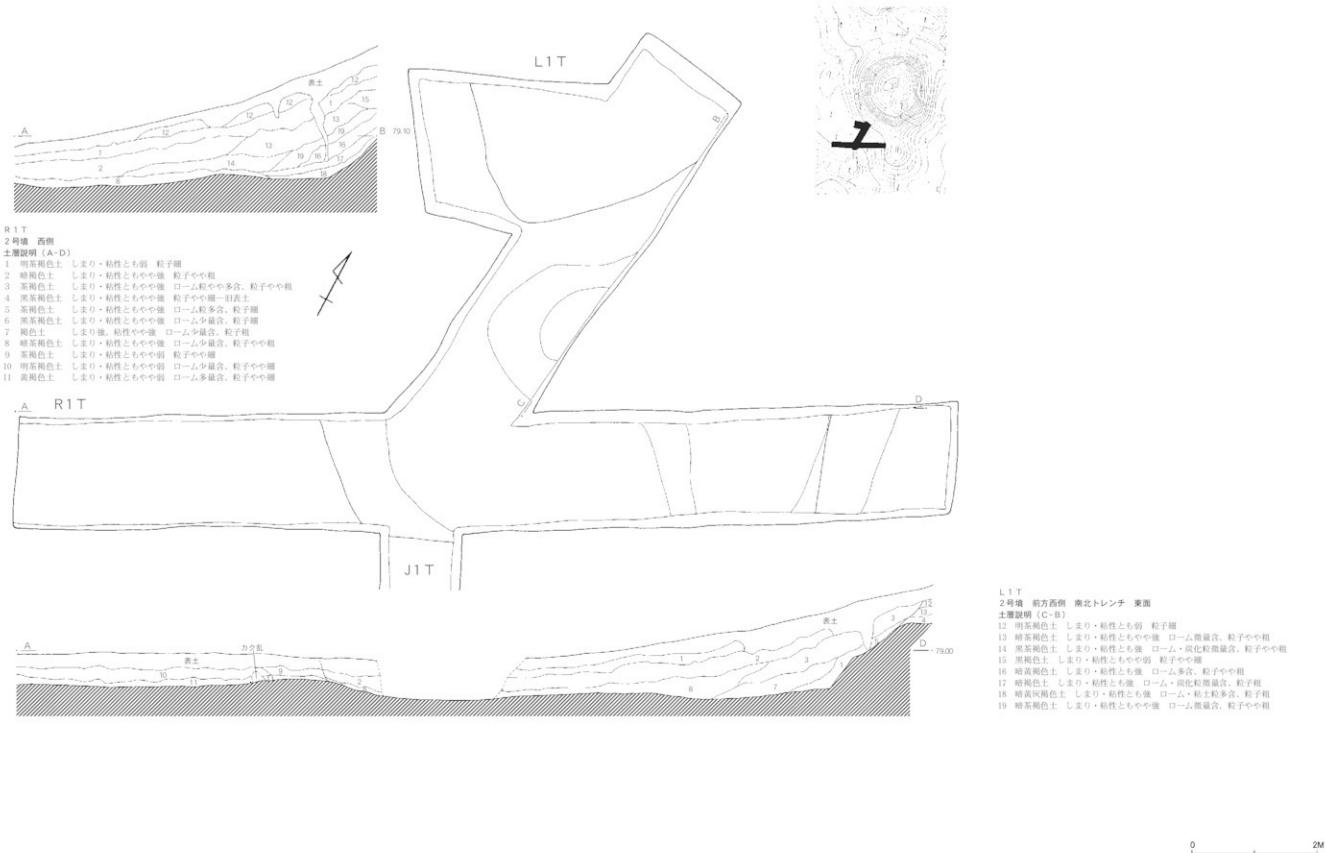
別第2図 1号墳O 1 T、O 3 T、G 1 T、A 2 T平面・土層図



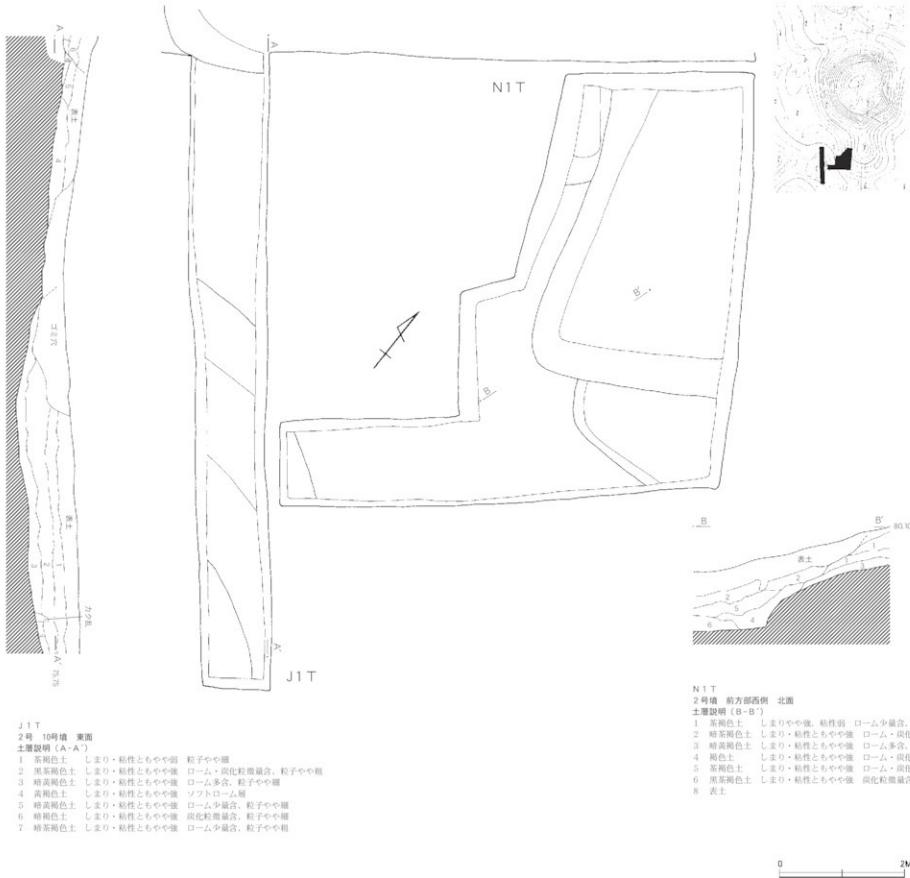
別第3図 2号墳H 0 T、H 1 T、O 2 T、G 0 T、K 2 T平面・土層図



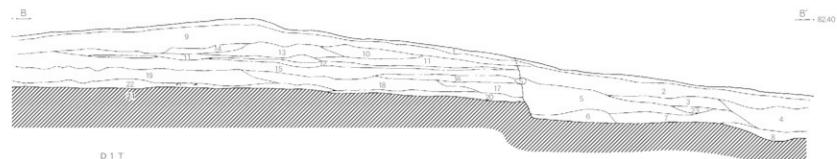
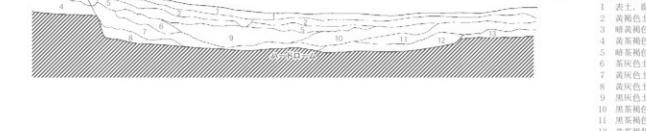
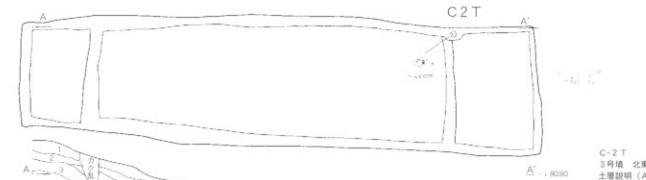
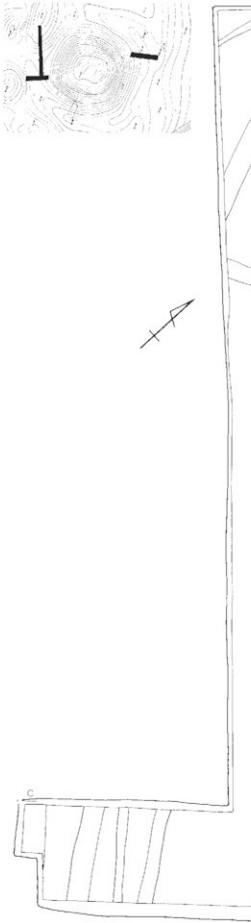
別第4図 2・12号墳P 1 T、H 3 T、K 1 T平面・土層図



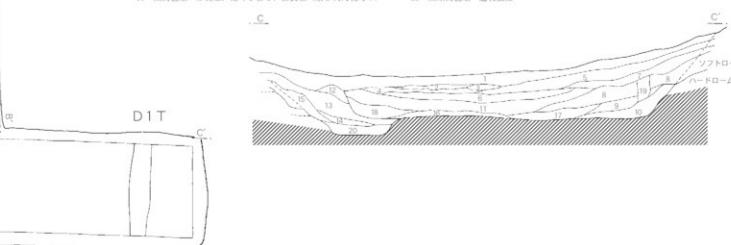
別第5図 2号墳L 1 T、R 1 T平面・土層図



別第6図 2号墳J1T、N1T平面・土層図

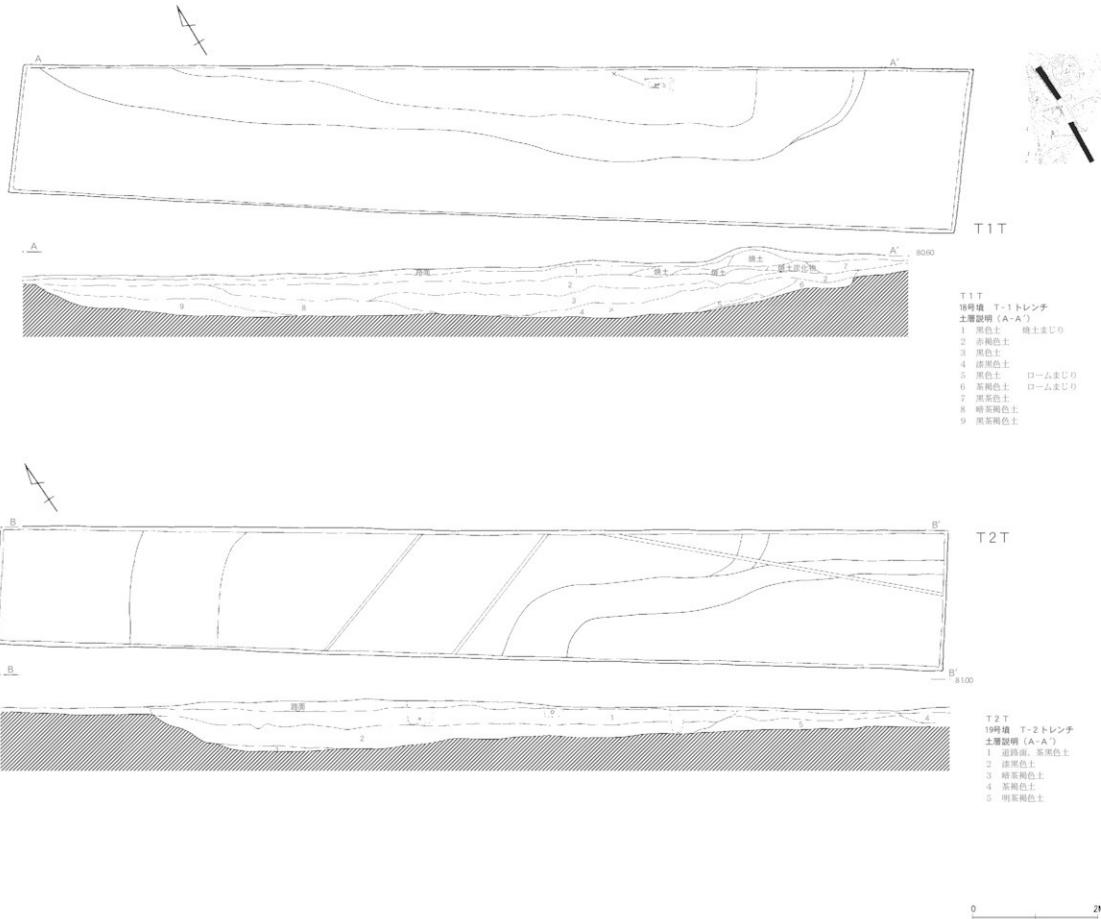


- 12 黄褐色土、茶褐色土、硬くしまる、砂粒を多量に含む
- 13 黑褐色土 ロームブロック、褐灰岩片20%含む
- 14 褐灰岩片砂質
- 15 黄茶褐色土 砂質、ローム粒子
- 16 黑褐色土 砂質、細粒
- 17 黑褐色土 破片化、鐵土粒子を含む
- 18 黄褐色土 砂質、モルタル
- 19 黄褐色土 破片化した茶褐色土、土體混在
- 20 红褐色土 砂質、褐灰岩粒子を含む
- 21 周溝底面 (地盤) 褐灰岩粒子を含む、茶褐色粘質土、硬くしまる
- 22 黑褐色土 遺物混在

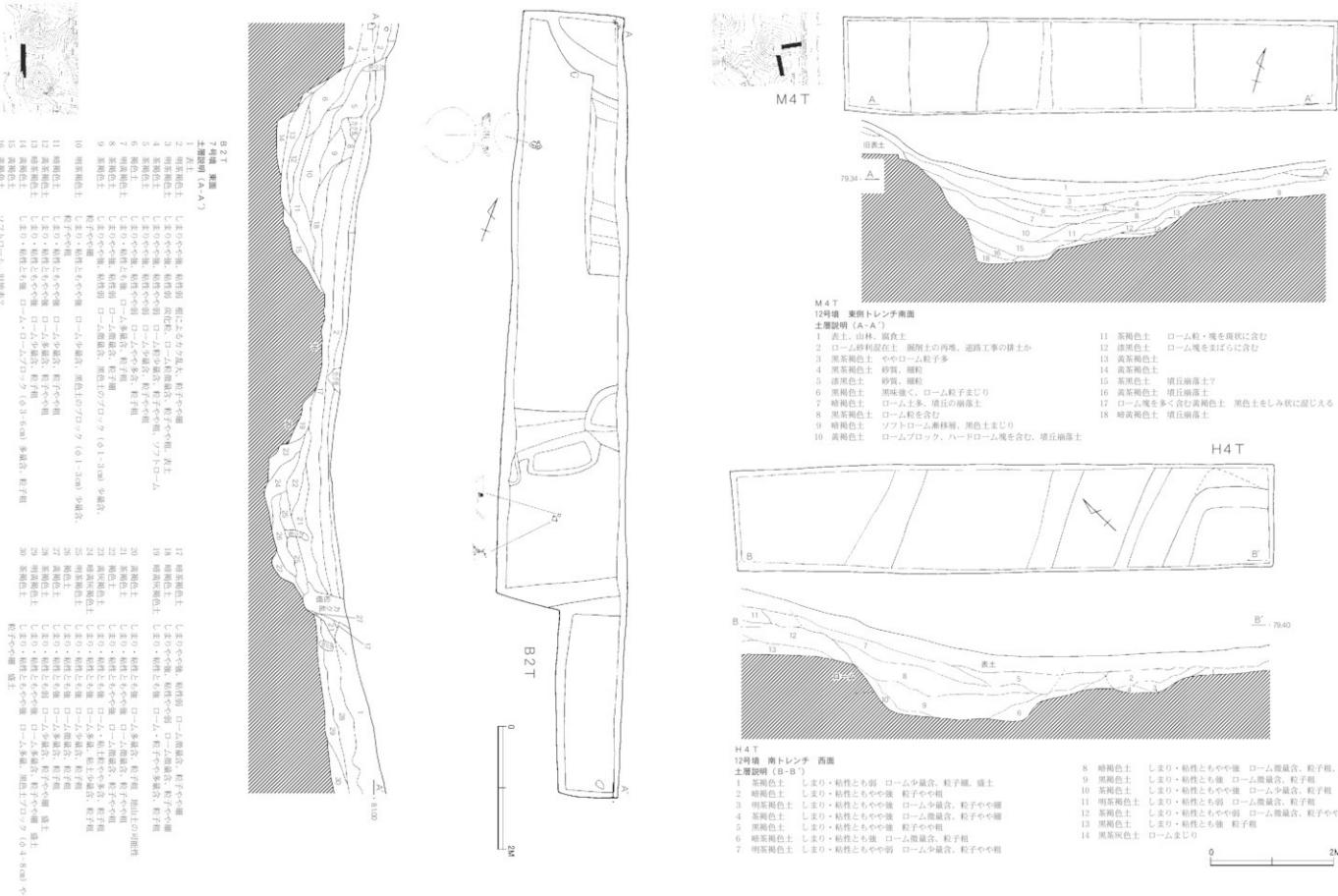


別第7図 3号墳D 1 T、C 2 T平面・土層図

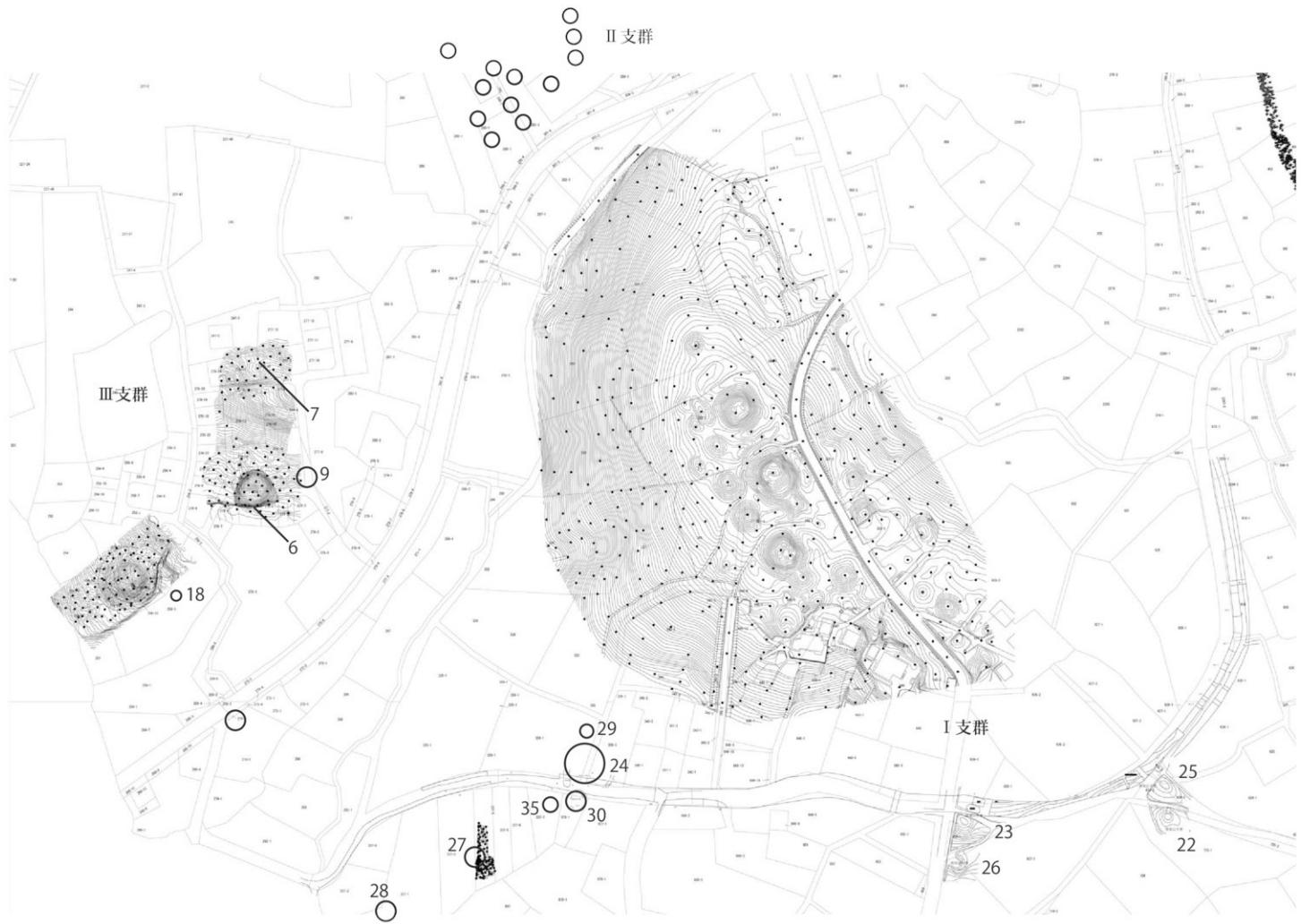
0 2M



別第8図 18・19号墳T 1 T、T 2 T平面・土層図



別第9図 7・8号墳B2T、12号墳M4T、H4T平面・土層図



別第10図 塩古墳群第I支群地形測量図